

令和7(2025)年度
文部科学省「青少年国際交流推進事業」委託事業

日独学生青年リーダー交流事業

報告書



National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

目次

事業概要	1
------	---

<派遣事業報告>

1. 参加者名簿	4
2. 日程	6
3. ダイジェスト	7
4. 学習成果発表会	21
5. 参加者アンケート	32
6. 個人レポート	33
7. 成果と課題	42

<受入れ事業報告>

1. 参加者名簿	46
2. 日程	48
3. ダイジェスト	49
4. 学習成果発表会	60
5. 成果と課題	66

事業概要

1. 事業趣旨

ボランティア活動を行っている日本とドイツの学生の交流を推進することで、高い国際感覚を備えた青少年を育成する。

2. 実施関係機関

(1) 主催

日 本：文部科学省

ドイツ：家庭・高齢者・女性・青少年省

(2) 実施

日 本：独立行政法人国立青少年教育振興機構

ドイツ：ベルリン日独センター

3. 研修テーマ

若者の社会参画

4. 参加人数

日 本：9名、引率者2名

ドイツ：8名、引率者1名

5. 日程

(1) 派遣

事前研修 7月26日(土) ※オンラインで開催

派遣 9月16日(火)～ 9月30日(火) 15日間

(2) 受入れ

日本受入れ 8月27日(水)～ 9月10日(水) 15日間

派遣事業報告

1. 参加者名簿

	氏名	主な所属団体	学校名
団長	生田周二	奈良教育大学 ESD・SDGs センター 特任教授	
副団長	木元謙太郎	国立阿蘇青少年交流の家 事業推進室事業推進係 主任	
1	足達亮太	札幌市教育委員会相談支援パートナー 兼学びの支援パートナー	北海道教育大学
2	大谷理化	一般社団法人 NO YOUTH NO JAPAN	大阪大学大学院
3	関根伶太郎	・さいたま市子ども食堂 和笑ひろば ・太郎右衛門自然再生地での環境保全活動	さいたま市立大宮国際中等教育学校
4	中田さや	Learn Link (自主企画ボランティア団体)	岡山県立倉敷天城高等学校
5	林菜摘	一般社団法人 THYME	日本大学
6	林李子	・HIB (広島イノベーションベース) ・N 高等学校 運営サポート	叡啓大学
7	藤田星流	・任意団体ツクリテ ・認定 NPO 法人カタリバ	中央大学
8	細谷彩羅	・一般社団法人 Japan Education Lab ・獨協大学図書館学生団体 BiVS	獨協大学
9	松野愛	・東京大学学生団体 FairWind ・東京大学学生団体 ichihime ・NPO 法人 マナビファクトリー ・東京大学学生団体 FICS	東京大学



日独学生青年リーダー交流事業日本団

2. 日程

月 日	滞在地	時間	プログラム
9月16日 (火)	東京 ベルリン	午前 午後	羽田空港 発 ベルリン・ブランデンブルク国際空港 着
9月17日 (水)	ベルリン	午前 午後 夜	説明：ベルリン日独センター概要 オリエンテーション 講義・ワークショップ：子ども・若者の参画 講義：ドイツの青少年育成活動概要 団ミーティング
9月18日 (木)	ベルリン	午前 午後	ベルリン市内歴史研修 テーマ：ナチス時代、東西ドイツの分断とベルリンの壁、 ドイツ統一に至るまでの歴史 訪問：プント・ユージェント（ドイツ環境自然保護連盟青 年部）連邦事務局
9月19日 (金)	ベルリン	午前 午後 夜	自主研修 日独合宿セミナー（班別ディスカッション） 交流会
9月20日 (土)	ベルリン	午前 午後 夜	見学：ラーヴェンスブリュック警告・追憶の場所（強制 収容所跡） 日独合宿セミナー（班別ディスカッション） 交流会
9月21日 (日)	ベルリン	午前 午後	日独合宿セミナー（班別ディスカッション/全体会） 団ミーティング
9月22日 (月)	ベルリン 及び ドレスデン	午前 午後	自主研修 ドレスデン移動
9月23日 (火)	ドレスデン	午前 午後	ドレスデン旧市街見学 懇談：ザクセン州政府子ども・若者コミッショナー ホストファミリーとの歓迎夕食会
9月24日 (水)	ドレスデン	午前 午後	訪問：ドレスデン・サポータープロジェクト 懇談：民主主義と勇気ネットワーク（NDC）ドレスデン 支部
9月25日 (木)	ドレスデン	午前 午後	訪問：ドレスデン工科大学政治学研究所 訪問：ドレスデン工科大学環境イニシアチブ 自主研修、団ミーティング
9月26日 (金)	ドレスデン	午前 午後	団ミーティング、学習成果発表会準備 ホームステイ
9月27日 (土)	ドレスデン	終日	ホームステイ
9月28日 (日)	ドレスデン	午前 午後	ホームステイ 学習成果発表会、全体の総括 歓送交流会
9月29日 (月)	ドレスデン	午前	ドレスデン空港 発
9月30日 (火)	東京	午前	羽田空港 着

3. ダイジェスト

<7月26日(土)>事前研修会

オンライン上ではあるが、団員同士の初顔合わせの場になった。まず、主催者挨拶や事業詳細に関する説明があった。

午前は、鳴門市市民生活部文化交流推進課のシュトライヒ・ダリオ氏を講師に招き、「ドイツを知る」をテーマに基礎知識に関する講義を受講した。午後は、令和7年度日独学生青年リーダー交流事業団長であり奈良教育大学特任教授の生田周二氏より、「日本における若者の社会参画及びドイツにおけるユースワーク」をテーマにご講義いただいた。その後、旅行会社より渡航に関する説明をや過年度参加者からの体験談を聞き、訪独に向けての準備と心構えを整えた。

<9月16日(火)>出国・ドイツ到着

朝7時に羽田空港に集合し、日本を出国した。14時間のフライトを経てミュンヘン空港に到着し、自由時間を過ごした後、乗り継ぎを経てベルリン・ブランデンブルク国際空港へ到着した。空港ではベルリン日独センターの牧野氏と牛込氏に出迎えていただき、ホテルへ移動した。ホテルに到着して事務連絡を受けた後、翌日からの研修に備え各自部屋で休息を取った。



<9月17日(水)>

○講義 「ベルリン日独センター概要」

「子ども・若者の参画」「ドイツの青少年育成活動概要」

講師：ベルリン日独センター 事務総長 ユリア・ミュンヒ 氏
ザクセン州青少年連合 事務局長 ヴェンケ・トルンポルト 氏
青少年参画窓口担当職員 スヴェタ・モーザー 氏
青少年団体活動担当 エマ・ヴォルフ 氏

ベルリン日独センターを訪問し、ザクセン州青少年連合のヴェンケ氏、スヴェタ氏、

エマ氏より、「子どもや若者の権利を保障するとは何か」について講義・ワークショップを受けた。講義では、子どもや若者が社会の一員として尊重され、意見を表明し、自己決定を行う権利を持つという基本的な考え方を中心に、ザクセン州青少年連合が実際に行っている取組が紹介された。特に、若者自身が企画や意思決定に関わる仕組みづくりや、地域と行政が連携して青少年の声を反映する制度設計が印象的であった。また、ドイツ連邦共和国における青少年援助の構造が、連邦・州・自治体の各レベルで明確に役割分担され、実践的に運用されている点も学ぶことができた。

昼食を共にしながら意見交換を行う機会もあり、講師の方々との交流を通して、ドイツの若者支援に対する姿勢や価値観をより深く理解することができた。日本と同様に少子化という課題を抱えるドイツにおいても、「子どもたちは私たちの未来である」という理念だけでなく、子どもと若者の「今」を尊重する視点が重視されていた。現在の権利保障と将来への備えの双方をいかに調和させるかという課題意識は、今後の日本の青少年支援を考える上でも大きな示唆を与えるものであった。



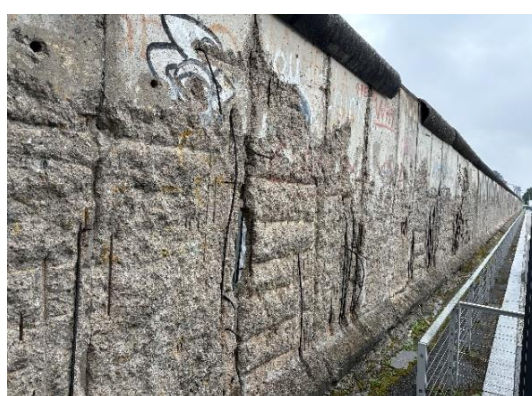
< 9月18日(木) >

○ベルリン市内歴史研修

講師：クリスティアン・ハーヤー 氏

午前中は、「ナチス時代、東西ドイツの分断とベルリンの壁、ドイツ統一に至るまでの歴史」をテーマに、クリスティアン・ハーヤー氏の案内のもとベルリン市内歴史研修を

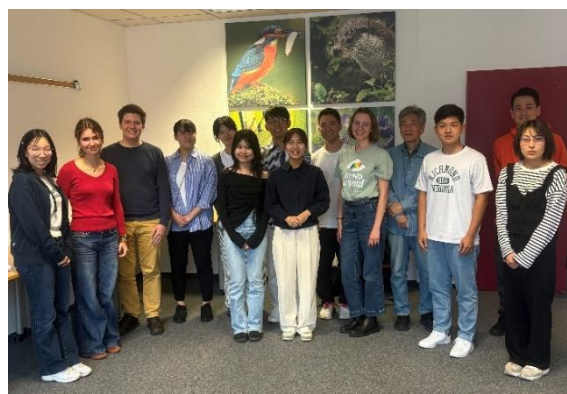
行った。ベルリン歴史研修では、ベルリンの壁記念館を訪れ、東西分断の歴史とその中で生きた人々の姿に触れた。壁は単なる境界ではなく、自由と抑圧、希望と絶望を象徴する存在であったことを学んだ。自由を求めて命を落とした人々の話を聞き、分断がもたらした苦しみの深さを実感した。現在、壁の跡地にはアーティストによる平和を願う絵が描かれており、過去の悲劇を記憶に留めながら新たな価値を生み出している。かつての分断の象徴が、今では共生と希望の象徴へと変化していることに強く心を動かされた。この体験を通して、平和や自由は当たり前ではなく、人々の努力と対話によって築かれてきたものであることを改めて学んだ。歴史を学び、対話を続けることの大切さを深く考えさせられた。



○訪問「ブント・ユージェント（ドイツ環境自然保護連盟青年部連邦事務局）BUNDjugend」

講師：政策・ネットワーク・プロセス部問担当 ユリアン・ライマン連邦事務局長
連邦理事メンバー アリーナ・ライツェ 氏

午後はブント・ユージェントを訪問し、講義を受けた。ブント・ユージェントは27歳未満の若者を対象とする青少年組織で、会員数は約8万2,600人にのぼる。草の根民主主義を基盤とし、デモや集会を他団体と連携して行うほか、新しい政策に対して意見を発信するなど、社会や政治にも影響を与えている。講義を通して、若者が自らの意見



を社会に反映させようとする主体的な姿勢を強く感じた。また、ドイツでは環境問題への意識が政治的関心と結びついており、そのことが若者の社会参画を自然に促している点が印象的であった。日本の若者が社会課題に向き合う上でも、同世代が政治や社会に積極的に関わる姿勢から学ぶことは多いと感じた。

<9月19日(金)>

○自主研修 「イーストサイドギャラリー」

午前は自主研修があり、イーストサイドギャラリーを訪れた。自主研修では、ベルリンの壁跡地に残るイーストサイドギャラリーを訪問した。全長1.3キロにわたる壁面には世界各国のアーティストが描いた壁画が並び、自由や平和への願いが表現されている。中でも特に印象に残ったのは、「兄弟のキス」と呼ばれる作品である。この絵には、壁を作って人権を抑圧した歴史的事実を踏まえて、和解や強制に向けた考えを深めていく必要があるという思いを感じた。かつて分断の象徴であった壁が、今では平和と表現の象徴へと変わっていることに強く心を動かされた。



○日独合宿セミナー 1日目

(ラーヴェンスブリュック・ユースホテル)

午後、ドイツ団とともにバスでラーヴェンスブリュック・ユースホテルへ移動した。この施設は、強制収容所の生存者の願いにより、「ラーヴェンスブリュック警告・追憶の場所」に隣接した女性看守の旧住居を青少年教育施設として活用して運営されている。到着後、ドイツ団と夕食を共にし、和やかな時間を過ごした。夜には交流会が行われ、ミニゲームなどのアイスブレイクを通して、参加者同士の親睦を深めることができた。歴史を学ぶ場であると同時に、異文化交流や仲間とのつながりを実感できる貴重な体験となった。



<9月20日(土)>日独合宿セミナー2日目

○ラーヴェンスブリュック警告・追憶の場所見学(強制収容所跡) 見学

講師：社会教育担当 アンジー・マイヤー 氏

強制収容所跡では、当時の劣悪な環境や、制度に従わざるを得なかった人々の悲しい歴史を、目で見て肌で感じながら学ぶことができた。この体験を通じて、歴史を繰り返してはならないという強い思いを実感した。また、加害の歴史や当時の過ちに向き合うドイツ国民の姿勢にも触れることができ、日本に同様の施設が残されていないことに疑問を感じる団員もいた。午後には班を2つに分け、ボランティアに対する国の支援や活動のハードルなど、多様なテーマについてディスカッションを行い、お互いの国の現状や課題を意見交換した。夜には焚火を囲む交流会があり、親睦を深めながら学びを振り返る貴重な時間となった。



<9月21日(日)>日独合宿セミナー3日目

○班別ディスカッション&全体発表会の準備

○全体会

前日までの班別ディスカッションの総仕上げと発表の準備を行った。日本団はドイツ社会やボランティア活動に対する疑問点を共有し、学びを深めた。全体会ではテレビ番組を模した個性的な発表やイラストを用いた発表が行われ、日独の社会やボランティア活動における支援や困難、激動の社会の中で若者にできることを互いに共有し合った。ドイツ団と社会やボランティア、若者の在り方についての議論を通して、日本社会や自己の在り方を再考することができた。



<9月22日(月)>

○ベルリン自主研修「抵抗博物館」「DDR Museum」

○地方プログラム開始

ベルリン最後の自主研修では団長の勧めを受けて抵抗資料館を訪れ、ドイツの抵抗の歴史にも目を向け、政治家だけでなく、軍内部や女性までヒトラー政権に反旗を翻し続け、抗い続けた人々の生き様を見た。合流したドイツ団からは、昨今のドイツではフィルターバブルにより、自分の価値観に留まる若者が増加し、排他的な視点で物事が判断される傾向があり、まさにヒトラー政権前夜のように問題視する声が挙げられたが、日本にも同様の問題が生じていると感じた。その後訪れた DDR Museum では分断後の東ドイツ社会について体験的に学び、抑圧的な政治や社会、戦争がいかに人々のかけがえない人生の幸福を奪うのか目の当たりにした。

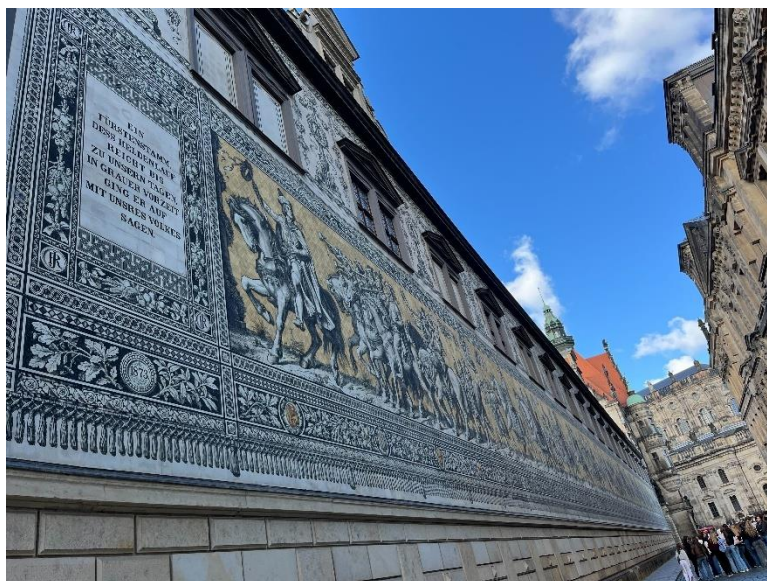


<9月23日(火)>

○ドレスデン旧市街見学

ガイド：斎藤 雅子 氏

午前は齋藤さんの丁寧なガイドとともに市内の歴史的建造物を巡った。15世紀からザクセン公国時代の歴史的建造物を見学した。壮大で豪華な建物に圧倒されたが、背景の深さにも驚愕した。特に感動したのは「君主の行列」で、歴代君主の絵を当時の背景を踏まえて書かれているだけでなく、約2万枚のマイセン磁器のタイルから作られており、非常に迫力があり、興味深かった。バロック様式のフラウエン協会は、第二次世界大戦や戦後の分断を乗り越えて、当時の素材も活かして再建されており、ドレスデンの象徴的な建築物だった。



○訪問「ザクセン州政府子ども・若者コミッショナー」

講師：スザン・リュートリヒ 氏

午後はザクセン州政府子ども・若者コミッショナーを訪れた。コミッショナーは、子どもや若者が直面する課題に対して深い理解と強い熱意を持っており、特に教育機会の格差是正や若者の社会参加を促す政策について、具体的な視点を示しており、非常に興味深かった。こちらの意見にも丁寧に耳を傾け、地域や文化の違いを超えて共有できる課題について、率直に建設的な意見交換ができた点が印象に残った。ザクセン州が若者の声を政策に反映させる仕組みを重視していることも強く感じられた。

今回の懇談を通じ、国や地域を越えた子ども・若者支援の可能性を改めて認識し、今後の協力の在り方について考える貴重な機会となった。

<9月24日(水)>

○訪問「ドレスデン・サポータープロジェクト」

講師：学習センター「思考へのキックオフ」事業コーディネーター

エーリック・グート 氏

アウトリーチ型&自由参加型青少年育成活動担当 ソニヤ・フィッシャー 氏

午前はデュナモスタジアムを訪れ、ドレスデン・サポータープロジェクトを訪問した。

クラブとサポーターが対立構造ではなく「一緒に作り上げる仲間」として扱われており、問題行動の抑止だけでなく、サポーター文化そのものを良い方向へ育てようとする姿勢が印象的だった。特に、サポーター自身が話し合い、応援スタイルやスタジアムでの振る舞いについて意見を交換できる場を設けている点が強く心に残った。単に禁止するのではなく、当事者が主体的に責任を持てるように促すことで、コミュニティの自浄作用が働く仕組みになっていると感じた。クラブが地域社会の一部であることを理解した上で、サポーターの生活背景や価値観にも寄り添おうとする姿勢は非常に学びが多かった。

今回の取組を知り、スポーツクラブが単なる娯楽の場ではなく、コミュニティの社会的な安定にも貢献できることを強く実感した。日本でも参考にできる点が多く、サポーター文化の発展に向けて学びが大きい取組だと思う。



○懇談「民主主義と勇気のネットワーク（NDC）ドレスデン支部」

講師：NDC リーダー&ザクセン州青少年連合職員 ヤニース・ロート 氏

午後に訪れた NDC ドレスデン支部との懇談では、民主主義教育を地域の若者や学校に



広げていくための実践が非常に体系的かつ丁寧に行われていることがよく分かり、学ぶ点が多かった。特に印象に残ったのは、公平や偏見、差別をテーマにしたケーススタディを用いたワークで、参加者が実際に状況を想像しながら多面的に考える仕組みがとてよくできていた点である。単に知識を教えるのではなく、自分の考えや相手の抱える背景について対話を通して深めるプロセスが魅力的だった。同じ事例を見ても、人によって判断基準や感じ方が違うことがすぐに可視化され、その差異について落ち着いて語り合うことで、多様性や公平性の感覚を自然に育てているように感じた。まさに“民主主義を体験する”教育だと感じた。また、NDCのスタッフが、若者を「導く対象」ではなく「対等なパートナー」として捉えている姿勢にも共感した。上から価値観を押しつけるのではなく、本人たちの意見や疑問を起点に対話を組み立てるアプローチは、日本でも重要性が高まっていると感じた。

< 9月25日（木） >

○訪問「ドレスデン工科大学政治学研究所（政治教育における教授法）」

講師：シュテファン・ブロイアー 氏

午前はドレスデン工科大学の政治学研究所を訪問し、政治教育の教授法がどれほど実践的で、かつ人間の心理や社会の動きを精密に捉えようとしているのかを強く感じた。政治シミュレーションの“ゲーム”が特に印象的だった。状況設定が生々しく、参加者の行動や選択の結果がすぐに政治的な力学として跳ね返ってくる構造は、恐怖を感じた。少しの判断の違いで合意形成が崩れたり、対立が急激に深まったりする様子を見ると、現実の政治がどれほど脆く、また人間の不安や欲求につけ込まれやすいものなのかがよく分かった。また、身近なゲームにもステレオタイプが組み込まれているという指摘を受け、私たちが思っている以上に政治に関わる範囲は広いのだと実感した。



○訪問「ドレスデン工科大学 環境イニシアチブ (TU Umweltinitiative)」

講師：学生ボランティア ヴィリー・ヴァイデマン 氏

午後にはドレスデン工科大学の環境イニシアチブを訪れ、学生主体の環境活動がここまで実践的で持続可能な形で運営されていることに驚かされた。活動内容は単なる啓発に留まらず、キャンパス内の資源循環の改善や、大学全体の環境方針に影響を与える提案づくりまで幅広く、学生団体の枠を超えた本格的な取組だと感じた。

印象的だったのは、環境問題を「行動で考える」姿勢が組織全体に浸透していたことだ。ワークショップやプロジェクトでは、参加者が自分たちの生活習慣や大学の制度に対して具体的に変化を起こす方法を一緒に探っており、そのプロセスが非常に実践的だった。理論と行動がしっかり結びついているや環境教育が充実している点は、日本の大学にも大いに参考になると感じた。



< 9月26日 (金) >

○ドレスデン自主研修「Dresdner Molkerei Gebrüder Pfund」「ツウィンガー宮殿」他 ○ホームステイ

自主研修の時間は、朝のドレスデンの街並みを見渡しながら、エルベ川を渡った先の新市街に向けて徒歩で移動し、「世界一美しい乳製品店」とされる「Dresdner Molkerei Gebrüder Pfund」を訪れた。店内の壁面や天井は世界三大陶磁器メーカーの一つであるピレロイ&ボッホの手がけた手作りのタイルで埋め尽くされ、ドイツ国民が古くから築き上げてきた卓越した技術力を垣間見ることができた。

その後は旧市街に移動し、ツウィンガー宮殿内に位置するアルテ・マイスター絵画館などを訪問した。古くから守られ続けてきた世界的絵画などが展示されており、作品から歴史的、社会的背景の変遷を感じるとともに、観光客以外の来館者も多く訪れていたことからアトリテラシーと国民性の関係について考えるきっかけとなった。

昼過ぎからは各ホストファミリーと合流しホームステイを開始した。暖かく迎え入れていただき、ビアガーデンに行ったりドイツの家庭料理を調理したりするなどして半日を過ごした。これまではホテルでの滞在だったため、ドイツの家庭の実生活や文化を体験することができた。



< 9月27日（土） >

○ホームステイ

終日それぞれのホストファミリーと共に行動し、ドレスデンの観光地を案内していただいたり、ホストファミリーとともにアクティビティを体験したりした。ここまでのプログラムでは知ることのできなかつた、ドイツにおける細かな風習や価値観などを直接知ることができた。また、ホストファミリーとの積極的な交流を通じて日本におけるあらゆる制度や文化を伝え興味を持ってもらうことができた。



<9月28日(日)>

○ホームステイ

○学習成果発表会

○歓送会

昨日に引き続き、午前中はホストファミリーと過ごした。昼に一度別れて団員で再集合し、学習成果発表会に向けた最終調整及び学習成果発表会を実施した。学習成果発表会では、ここまでの研修で学んだことを「経済・福祉」「加害・被害と抵抗」「社会教育」「政治との関わり」の4つの項目に沿って整理した上で、考えたことをまとめ発表した。日独の相違点について触れてドイツを礼賛するだけではなく、その相違点が何によって引き起こされているのか、団員の日頃の活動や実生活に照らして現状をどう評価するかなどの考察を共有することができた。

その後、ホストファミリーと再会し交流しながらドイツ滞在最後の夕食を摂り、感謝の言葉とともに別れを告げた。



<9月29日(月)>

○帰国

バスでドレスデン空港へ移動した後、見送りに来て下さった受入れ担当者、通訳の方に滞在中の謝意を伝え、別れを惜しみながらフランクフルトへ向かった。フランクフルト国際空港にてドイツ最後の時間を過ごし、日本へ向けて空港を出発した。



<9月30日(火)>

○帰国

移動中の機内で日をまたぎ、ドイツを発った翌午前に羽田空港へ到着した。研修の総評を行い解散した。



4. 学習成果発表会

日時	2025年9月28日 15時～17時
場所	ドレスデン
内容	2週間滞在の学習成果発表会
参加者	日本団 11名

私たちは日独学生青年リーダー交流事業に参加し、国内外での研修を通じて、「若者の社会参画」を学んだ。積極的に社会参画しているドイツの若者との対話や交流は、日本では得ることのできない大変有意義な研修であった。ドイツ研修の最終日に実施した学習成果発表会では、研修で得た学びとして、以下の4つをテーマにプレゼンテーションを行った。

① 滞在地

本研修では、ベルリン、ブランデンブルク、ドレスデンの3都市を訪問し、歴史教育、社会参画、社会福祉、ボランティア制度、若者支援、スポーツ文化、政治教育など多角的なテーマについて学んだ。現地の団体訪問や講義、ディスカッション、ホームステイを通して、若者が社会を担う主体として育つための仕組みと文化の違いを実感した。

◎ベルリン

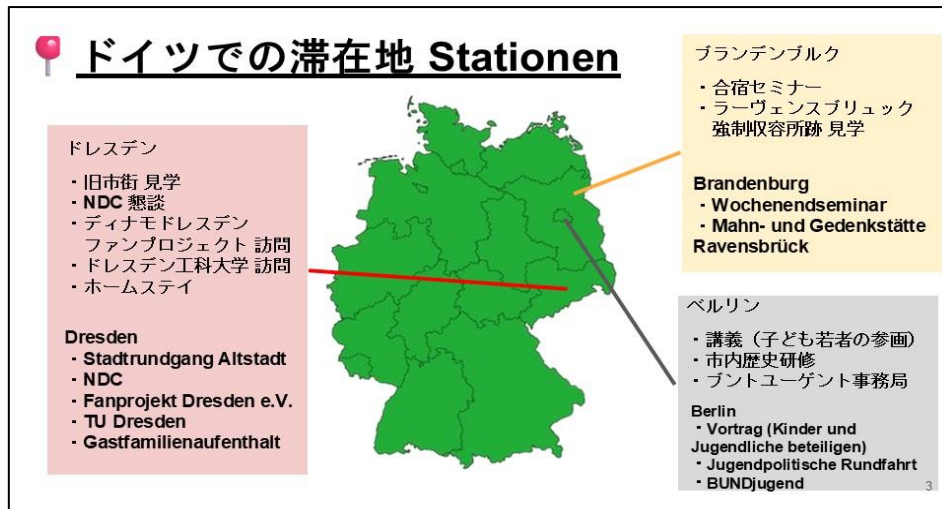
- ・講義（子ども若者の参画）
- ・市内歴史研修
- ・ブントユーゲント事務局

◎ブランデンブルク

- ・合宿セミナー
- ・ラーヴェンスブリュック ユースホステル
強制収容所跡 見学

◎ドレスデン

- ・旧市街 見学
- ・NDC 懇談
- ・ディナモドレスデン
ファンプロジェクト 訪問
- ・ドレスデン工科大学院 政治研究所
- ・ドレスデン工科大学 訪問
- ・ホームステイ



② 経済福祉

現代社会では、少子高齢化や地域格差の拡大が深刻化しており、特に若者や子育て世帯を取り巻く経済的・社会的環境は大きく変化している。日独両国は、共通の社会課題を抱えながらも、それぞれ異なる制度的・文化的背景のもとで対応を行っている。本章では、若者や子育てを取り巻く環境の変化、地域・経済格差の現状、制度上の違いという三つの観点から、両国の特徴と課題を考察する。

1. 若者や子育てを取り巻く環境の変化

少子高齢化が進行する中で、社会における若者や子育て世帯の存在は相対的に小さくなりつつある。これに伴い、子育てに対する社会的支援が十分に機能していない地域も多く、「子どもに優しくない社会」と指摘される現状がある。

さらに、教育費や生活費の増加、非正規雇用の拡大によって若年層の経済的基盤は不安定化している。これらの問題は、家庭の問題にとどまらず、社会全体の活力や人口構造の持続可能性に影響を及ぼす。こうした状況の中で、若者や子育て世帯を社会全体で支える体制を構築することが求められている。

2. 地域格差・経済格差

日本では東京への一極集中が進み、地方の人口減少や雇用機会の縮小が課題となっている。一方で、ドイツでもザクセン州など東部地域では高齢化が進み、地域格差が顕在化していることを、研修を通して学んだ。両国ともに地域間の不均衡が社会的課題として共通しているが、アプローチには違いがある。ドイツでは再統一後、地域再生を目的とした政策を進め、一定の成果を上げてきたが、若者の都市部流出は依然として続いている。日本においても、都市に集中する経済構造を見直し、地方における暮らしやすさと働きやすさを両立させる政策が求められている。

3. 制度上の違い

社会保障制度の面では、ドイツが低所得者や子育て世帯への支援を手厚く行っていること

が特徴である。育児休暇や児童手当、住宅補助など、経済的負担を軽減する制度が整備され、若者が自立しやすい環境が形成されている。

一方で、日本は医療機関へのアクセスが良いという強みを持つが、行政手続きが煩雑で支援が十分に行き届かない場合がある。また、社会保障の利用に対するスティグマ（偏見）が根強く、支援を受けることへの心理的な壁が存在する。同じ社会課題を抱えながらも、両国の制度運用や国民意識の差が、福祉の受け止め方に影響していると言える。

総括

日本とドイツはいずれも、少子高齢化や地域格差といった共通の課題に直面しているが、その対応の仕方には明確な違いが見られる。ドイツは社会全体で弱者を支える姿勢を制度として確立しており、日本においてもこのような社会的連帯の考え方を取り入れることが求められる。

経済・福祉	Wirtschaft/ Soziales
● 若者や子育てを取り巻く環境の変化	● Lebenswelten von jungen Menschen und Familien verändern sich
● 地域格差・経済格差	● Regionale und soziale Ungleichheiten
● 制度上の違い	● Systemische Unterschiede

③ 加害・被害と抵抗

ドイツ社会は、歴史的な過ちと向き合いながら、抵抗の精神を現代に引き継いできた。今回は、ドイツの歴史的な抵抗から気候危機に対する活動、そして未来に対する責任という三つの視点から、ドイツにおける「抵抗」の意義を考察したスライドの総括を下記に述べる。

1. 歴史的な抵抗: ナチス時代の抵抗運動

1.1 抵抗の実態と記憶

ドイツ社会においては、ナチス時代に対する抵抗が強く意識されている。抵抗記念館では、軍の上層部によるクーデター計画だけでなく、一般市民による抵抗にも焦点を当てている。これは、歴史を「加害者」と「被害者」という二元論だけで捉えるのではなく、「抵抗した人々」という第3の視点を重視する姿勢の表れである。

1.2 強制収容所における抵抗

特筆すべきは、強制収容所という極限状態においても抵抗が存在したことである。例

えば、収容者たちは靴に細工を施すなど、小さな抵抗を行っていた。物理的な自由やアイデンティティを奪われても、不条理に対して抵抗する姿勢を失わなかった人々の存在は、人間の尊厳と抵抗精神の不可分性を示している。

1.3 抵抗の普及

重要なのは、抵抗が一部のエリート層だけでなく、一般市民の間にも広く存在していたことである。この歴史認識は、現代ドイツにおける「市民が社会に対して抵抗する権利と責任」という価値観の基盤となっている。

2. 気候危機に対する活動：現代の抵抗運動

2.1 若者世代による環境ストライキ

現代ドイツでは、学生や若者が中心となって環境問題に対するストライキを展開している。特に、今回の事業で訪問したドレスデン工科大学の学生環境団体「TUUWI」や「Fridays for Future」に代表される環境運動は、気候危機という不条理に対する抵抗の現代的形態である。若者たちは、環境問題への不十分な対応に対して、ストライキという形で不満と抵抗を表明している。

2.2 歴史的抵抗との連続性

環境活動は、単なる政策提言にとどまらず、「抵抗」として捉えられている点が重要である。これは、ナチス時代の不条理に対する抵抗精神が、形を変えて現代に継承されていることを示している。権威や既存のシステムに対して、市民が声を上げることは正当な権利であり、むしろ責任であるという社会的コンセンサスが存在している。

3. 未来に対する責任：戦争教育と歴史認識

3.1 ドイツと日本の戦争教育の違い

ドイツと日本の戦争教育には顕著な違いが見られる。

ドイツの教育

- ・加害の歴史に焦点を当て、戦時中にドイツ軍が行った行為を詳細に学ぶ
- ・なぜナチス政権が生まれたのか、その構造的・社会的要因を深く探究する
- ・自国が起こした悲劇についてかなりの時間をかけて学習する
- ・今後同じ過ちを繰り返さないために何が必要かを考える教育

日本の教育

- ・戦時中の日本の被害に重点を置く傾向がある
- ・戦争に関する知識を暗記中心で学ぶ
- ・なぜ戦争が起きたのかという構造的な理解が不十分

3.2 当事者意識と歴史への責任

ドイツの教育において重要なのは、歴史に対する当事者意識を育むことである。過去の出来事を単なる知識として学ぶのではなく、「なぜこのようなことが起きたのか」「自分たちがその時代にいたらどうしていたか」「二度と起こさないために何をすべきか」という問いを通じて、歴史を現在と未来につなげる教育が実践されている。

3.3 無関心であってはならない

ドイツ社会が強調するのは、「歴史に対して無関心であってはならない」という原則である。自国が起こした課題に目を向け、理解を深めると同時に、今後どうしていくべきかを考え続ける姿勢が、未来に対する責任として位置付けられている。

日本社会への示唆

日本社会では、権威や不条理に対して行動を起こすことは少なく、「仕方ないもの」として受け入れる傾向が強い。これはドイツの抵抗文化と対照的である。ドイツでは、不正や不条理に対して声を上げることが市民の責務として認識されており、ボランティア活動さえも「社会への抵抗」として捉えられることがある。よって、日本においても、歴史教育を知識の暗記から、当事者意識を持った学びへと転換する必要がある。自国が起こした課題に真摯に向き合い、理解を深めることで、未来世代への責任を果たすことができる。

総括

ドイツ社会における「抵抗」は、過去の歴史的教訓から現代の気候危機への対応、そして未来世代への責任という形で一貫している。ナチス時代の抵抗者たちが示した不条理に対する姿勢は、現代の若者による環境運動へと受け継がれ、徹底した歴史教育を通じて未来への責任として昇華されている。また、物理的な自由を奪われても抵抗する姿勢を失わなかった強制収容所の人々の精神は、今日のドイツ社会において「市民が声を上げること」の正当性を支えている。つまり、この抵抗の文化は、歴史に対する深い省察と、未来に対する強い責任感によって支えられていることが理解できた。

加害・被害と抵抗 Täter/Opfer und Widerstand	
● 歴史的な抵抗	● Widerstand (im Zweiten Weltkrieg)
● 気候危機に対する活動	● Klimabewegung
● 未来に対する責任	● Verantwortung für die Zukunft

④ 社会教育

現代社会における社会教育は、学校教育を終えた後も人々が学び続け、社会に積極的に関わ

るための重要な基盤である。特に若者が社会の一員として責任を持ち、主体的に行動する力を育むことは、民主的な社会の維持に欠かせない。本章では、ドイツのボランティア制度、ルール形成における教育の違い、そしてメディアの二面性という三つの視点から、日独の社会教育の特徴と課題を考察する。

1. ドイツのボランティア制度

ドイツでは、「社会奉仕活動年 (FSJ)」という、若者が社会奉仕活動に参加する制度が存在している。国や自治体から金銭的支援が提供されるため、経済的負担を抑えつつ社会貢献に参加することが可能である。このような制度は、若者が学校教育を終えた後も社会と関わり続ける機会を確保し、社会教育の一環として機能しているといえる。

一方、日本ではボランティア活動が「無償・自発的な奉仕」として捉えられる傾向が強く、長期的な継続が難しい。経済的・制度的な支援の少なさに加え、活動そのものが「個人の善意」に依存している側面がある。若者が社会活動を継続的に行うためには、制度的なサポートと社会的評価の仕組みを整えることが必要である。

2. 与えられたルールと作るルールの違い

教育や社会活動の場において、日本では「与えられたルールを守る」ことが重視される。一方、ドイツでは「自分たちでルールを作る」機会が多く与えられており、活動の前段階でルールを自ら設定するプロセスが重視されている。自ら決めたルールには責任を持ちやすく、その結果として活動への主体性や自律性が育まれる。このような教育の在り方は、民主的な価値観を実践的に学ぶ機会にもなっている。

日本においても、与えられた枠組みの中で行動するだけでなく、自分たちで考え、決め、実行する経験を教育の中に組み込むことで、若者の社会的責任感や問題解決能力を育てることが期待される。

3. メディアの二面性

メディアは社会教育において重要な役割を果たす一方で、その影響力には正負の両面が存在する。ポジティブな側面としては、情報の共有や意見表明の機会を広げ、市民の自発的な社会参加を促進する働きがある。特に若者にとっては、SNS などを通じて社会問題に関心を持ち、意見を発信する場となっている。

しかし一方で、SNS のアルゴリズムによる「フィルターバブル」が生じ、自分と異なる意見に触れる機会が減少している。また、過激な情報ほど拡散されやすい傾向にあり、社会的分断を助長する危険もある。

ドイツでは、ナチス時代のプロパガンダの反省から、批判的に情報を読み解く「メディアリテラシー教育」が重視されているのに対し、日本ではその取組が限定的である。情報を鵜呑みにせず、批判的に考える力を育む教育が今後の課題といえる。

総括

社会教育は、個人の学びを社会的実践へとつなげる重要な役割を担っている。ドイツで

は、ボランティア制度やルール形成の教育を通じて、若者が主体的に社会に関わる仕組みが整備されている。一方、日本では社会参加が個人の自発性に委ねられる傾向が強く、制度的な支援や教育の在り方に課題が残る。

また、メディアの発達によって情報の取得が容易になった一方で、偏った情報環境に陥るリスクも高まっている。今後の社会教育には、若者が自ら考え、選び、行動できる力を育てるとともに、情報を批判的に読み解く力を養うことが求められると考える。

社会教育	Jugendarbeit
<ul style="list-style-type: none"> ● ドイツのボランティア制度 	<ul style="list-style-type: none"> ● Ehrenamt in Deutschland
<ul style="list-style-type: none"> ● 与えられたルールと作るルールの違い 	<ul style="list-style-type: none"> ● Vorgegebene Regeln vs. gemeinsam erarbeitete Regeln
<ul style="list-style-type: none"> ● メディアの二面性 	<ul style="list-style-type: none"> ● Dualität der Medien

⑤ 政治教育

1. 財源と独立性の担保

ドイツでは「補完性の原則」に基づき、民間団体が主体的に活動できるよう、自立的な活動を尊重しながら財的支援が行われている。これにより、専従職員を持つ団体が持続的に活動でき、若者の社会参画が安定して進む。国がすべてを管理するのではなく、市民や団体が社会課題を担い、行政がそれを補う形で社会を支えている。そのため、団体は安定した財源を得ながらも独立性を保つことができる。

2. 政治との距離の近さ

ドイツでは市民団体と政治家のネットワークが体系化され、アドボカシー活動や懇談の機会が保障されている。そのため、政策決定層との距離が近く、活動への意欲も保たれやすい。若者が議員や自治体と直接対話できる機会も多く、政治を自分の生活と結びつけて考える力が育まれている。政治が「遠いもの」ではなく「共に創るもの」という感覚が根付いている。

日本においても、市民が政治に対して声を上げやすい環境づくりが求められる。

3. 民主主義を支える政治教育の重要性

ドイツでは第二次世界大戦後、「過去の過ちを繰り返さない」という強い理念のもと、政治教育が重視されている。学校教育では、単なる知識の詰め込みではなく、対話や討論を通じて知識の暗記ではなく、多様な意見を尊重しながら社会問題を考える授業が行われている。これらは、自ら考える力を育てることが目的である。生徒は自らの意見を

形成し、異なる立場を理解する訓練を受ける。政治教育は歴史教育とも深く結びついており、社会の成り立ちを批判的に考察する姿勢を養うことが目的とされている。こうした教育が、民主主義社会の基礎である「批判的思考力」や「他者への寛容」を育て、市民の「社会的責任感」を支えている。歴史教育とも連動し、「なぜ不条理が生まれたのか」「自分ならどう行動したか」「未来に何を残すのか」という問いを通じて、若者が歴史と現在を結びつけて考えることが求められる。

この教育は、現代の環境運動や社会活動へと継承され、「声を上げることは義務である」という社会的合意の土台となっている。

日本では、政治教育が依然として慎重に扱われる傾向があり、制度や選挙制度などの知識中心にとどまりやすい。そのため、政治を「自分ごと」として捉える機会が少なく、若者の政治的無関心にもつながっている。

日本への示唆

日本においては、民間団体が自立的に資金を得られる仕組みを整えることが求められる。具体的には、寄付文化の促進、社会的投資の拡充、税制優遇の強化などを通じて、持続可能な財政基盤を築く必要がある。また、財政支援と同時に「団体の独立性を守る仕組み」を制度化し、行政と民間団体が対等な立場で協働できる環境づくりが重要である。

さらに、政治と市民社会の対話を常態化する仕組みの構築が不可欠である。行政主導の一方的な「意見公募」ではなく、市民団体や地域住民と政策決定者が双方向で意見を交わす政策協議の場を設けることが必要だ。特に、若者が政治家や議員と直接関わる機会——例えば模擬議会や政策討論会——を増やすことで、政治参加への関心と責任感を育むことができるだろう。

加えて、政治教育の在り方も再考すべきである。政治教育は「中立性の確保」と「主体性の育成」を両立させる方向で見直し、知識の伝達だけでなく、生徒同士の討論や模擬選挙、地域課題の探究など、実践的で対話的な学びを重視することが重要である。教育機関等でこうした教育を通じて、政治を「遠い存在」ではなく「自分たちの生活を形づくるプロセス」として捉える感覚を養うことが期待される。

総括

政治教育についての学びを振り返ると、最も印象的だったのは、ドイツでは政治教育が「知識の伝達」ではなく「社会をより良くするために行動する力を育てる教育」として位置付けられている点である。

第二次世界大戦の反省を基盤に、民主主義を守ることを社会的責任と捉え、市民一人ひとりが当事者として参加する文化を育ててきた。そのため、政治教育は学校教育にとどまらず、地域の教育機関、市民団体、議会、若者団体など、多様な主体が連携しながら継続的に担っている。特に印象的だったのは、以下の3点である。

(1) 「答えを教える」のではなく、「自ら考え判断する力を育てる」教育であること

教員は立場を押し付けず、複数の視点から議論できる場を作り、民主主義のプロセス

そのものを経験させる。

(2) 若者の声が実際に政治過程に届く仕組みがあること

児童・生徒議会、若者向け政治対話の場、政策提言の制度など、参加が一時的なイベントではなく継続的なプロセスとして制度化されている。

(3) 「参加する意味」を社会全体で共有していること

無関心は民主主義を危うくするという歴史的教訓が、教育や市民活動に明確に反映されている。

そのため、意見を述べること、議論すること、行動することが、社会をよりよくするための責任として認識されている。

これらは相互に連動し、行政・市民・教育が一体となって民主主義を支える構造を形成している点に特徴がある。

日本が今後、持続的で開かれた社会を築くためには、制度や支援の「整備」にとどまらず、社会全体で市民参加を促す文化と意識を育てていくことが重要である。すなわち、「支えられる参画」から「自ら創り出す参画」へと転換することが、日本社会に求められる方向性である。

政治との関わり	Verhältnis zur Politik
● 財源と独立性の担保	● Sicherstellung von finanziellen Mitteln und Unabhängigkeit
● 政治との距離の近さ	● Nähe zur Politik
● 政治教育の重要度	● Wichtigkeit von politischer Bildung

⑥ 運営評価

本評価は、日独学生青年リーダー交流事業の運営に関して、参加者からのフィードバックを基に高評価項目と改善が必要な項目を分析したものである。

高評価項目

1. スタッフ対応

評価のポイント

- ・事業運営スタッフの対応が参加者から高く評価されている
- ・適切なサポート体制が構築されていることを示している
- ・参加者の質問や要望に対して迅速かつ丁寧な対応がなされていると考えられる

分析：スタッフの質の高い対応は、参加者が安心してプログラムに集中できる環境を提供しており、交流事業の成功において重要な基盤となっている。特に異文化交流

という特性上、言語や文化の違いによる不安を軽減するスタッフの役割は極めて重要であった。

2. 友人・同僚への推奨度

評価のポイント

- ・参加者の満足度が高く、他者への推奨意欲が強い
- ・プログラムの価値が参加者に十分に認識されている
- ・ポジティブな口コミ効果が期待できる

分析：友人や同僚への推奨度の高さは、プログラム全体の質の高さを示す総合的な指標である。参加者が自身の経験を肯定的に評価し、他者にも同様の経験を勧めたいと考えていることは、事業の持続可能性と発展性を示している。これは日独交流の輪が自然に広がっていく可能性を示唆していると考察できる。

低評価項目(改善が必要な領域)

1. 交流時間の十分性

課題

- ・参加者間の交流時間が不足していると評価されている
- ・より深い関係構築や文化理解のための時間が必要とされている

原因

- ・プログラムの密度：視察、講義、ディスカッションなど、多様なコンテンツが詰め込まれており、自由な交流時間が圧迫されている可能性
- ・言語の壁：異なる言語での交流には通常以上の時間を要するが、それが十分に考慮されていない可能性

影響

- ・表面的な交流にとどまり、深い相互理解に至らない
- ・帰国後のネットワーク維持が困難になる可能性

- ・事業の長期的な効果（リーダーシップ育成、国際的ネットワーク構築）が限定的になる

運営評価	Auswertung
● 高評価	● Positiv:
スタッフ対応	Betreuung
友人・同僚への推奨度	Weiterempfehlung an Freunde und Kolleg*innen
● 低評価	● Negativ:
交流時間の十分性	Zu wenig Zeit für Austausch

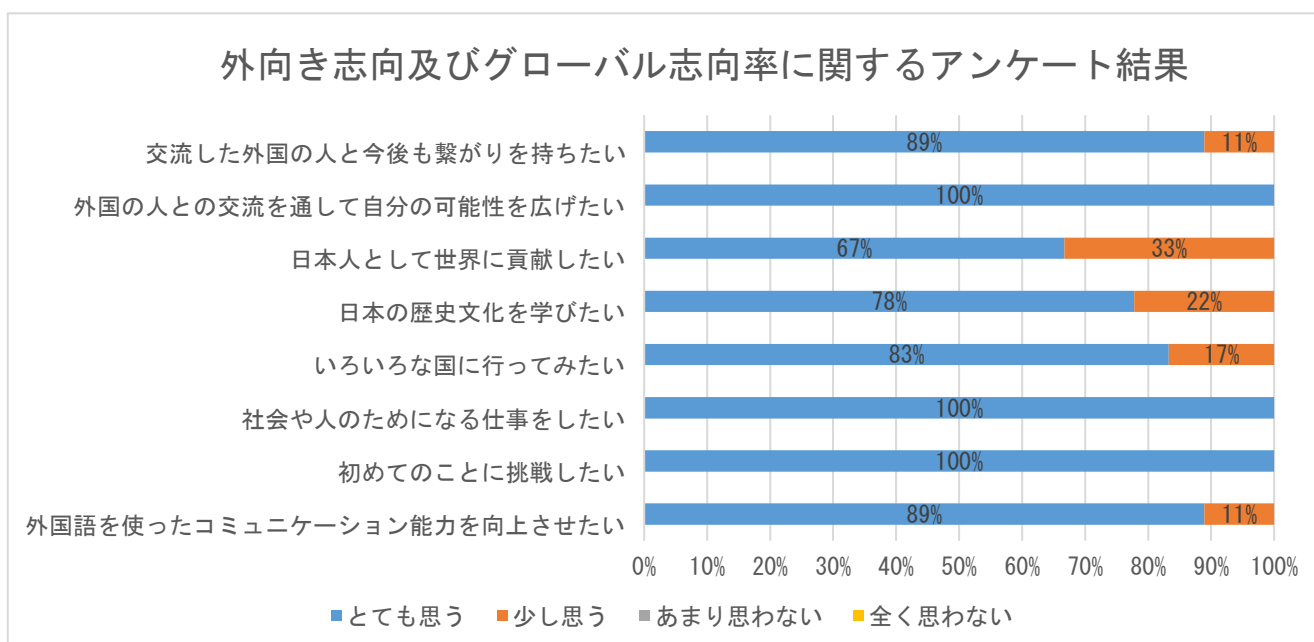
5. 参加者アンケート

(1) 事業全体の満足度



「事業全体の満足度」に対する回答は、派遣者9名全員から「満足」という回答を得ることができた。

(2) 外向き志向率、グローバル人材率



【外向き志向とは】

文部科学省の定めた調査項目3項目「交流した外国の人と将来も繋がりをもちたいと思いますか」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか」「日本人として世界に貢献したいと思いますか」の結果を集計したものである。当機構では、それらの問いに対して肯定的な回答の合計が80%以上を得ることを目標とし国際交流事業を行っている。

【グローバル人材志向率の分析】

当機構では、上記の外向き志向調査に加え、独自に語学力・コミュニケーション能力及び異文化に対する理解と日本人のアイデンティティ等を加えた8項目のアンケートを作成し、「グローバル人材志向率」として、平均80%以上の肯定的な回答を得ることを目標に事業を実施している。本事業においては、肯定的な回答が100%となっている。

■氏名 足達 亮太

■勤務先(役職) 札幌市 相談支援パートナー兼学びの支援パートナー

■現在の仕事内容(50字以内) 中学校における別室登校をする生徒のサポート、一般教室で学習において個別支援を必要とする生徒のサポートを行う

■ ドイツで学習したこと(600字以内)

テーマ「若者の社会参画」

ドイツでは、「若者が社会に参画すること」が当然であるという社会的な環境が整っていると感じた。例えば「社会的奉仕活動年」など、若者が“働く”とは異なる形で社会を経験できる制度がある。また、学校教育だけでなく「家庭教育」や「社会教育」も充実しており、国の法律や制度も若者の社会参画を支える仕組みとして機能している。そのため、若者が社会に関わることへの心理的なハードルが低く、自然な形で社会とのつながりを持つようになっている。そのような社会だからこそ、自分の「考え」を持ち、それを「表現すること」が当然のこととして受け入れられていると感じた。その背景には、ヒトラー政権時代の過ちを繰り返さないという強い思いがある。「ベルリンの壁」や「女性強制収容所跡」など、過去の加害の歴史を直視し、正しく語り継ぐ姿勢が社会全体に根付いていた。私自身、日本の学校で生徒の社会参画を支援してきた経験から、ドイツでは若者が社会を自分ごととして捉える力を教育と社会の両面で育てていることを実感した。こうした教育や社会の在り方によって、政治問題や環境問題なども「自分たちの問題」として主体的に考える文化が形成されているのだと感じた。

■ ドイツでの学習を、どのように活かしたか。(1,000字以内)

私はドイツで得た学びと刺激を、研修後に予定していたベトナムでのスクールボランティア活動で実践した。日本で行ってきたボランティア活動は、大学のカリキュラムの延長として始めたものであり、活動内容は既に用意された枠組みの中で進む「参加型」の側面が強かった。ドイツ研修では、若者が自ら課題を見つけ、社会の一員として主体的に行動する姿を学び、活動に「参画」することの意味を深く知った。そこでベトナムでは、前例も指示もない環境で、自ら活動内容を定めることを意識して取り組んだ。まず、日本人学校の先生方に「どのような支援が必要か」を丁寧に聞き取り、自分がどの場面で力になれるかを探っていった。こうした対話の積み重ねは、人とのつながりを広げ、結果的に現地の日本語センターでのボランティアにも参加する機会を得た。朝から夕方までは日本人学校で、夕方から夜は日本語センターで活動するという日々は、自分で選び、組み立て、責任を持って行動するという「参画」の姿勢そのものだったと感じている。

さらに、この経験を通じて「学びを自分だけで終わらせない」という思いが芽生えた。日独学生青年リーダー交流事業で出会った仲間たちは、自らの考えや課題意識を社会に向けて形にしていた。彼らの姿勢に触れ、「私も社会の一員として行動したい」と強く思うようになった。ボランティアや活動団体の中心となり、誰かのために行動している若者が多くいることを知り、私も一歩踏み出す必要があると感じた。

現在の日本の学校現場では、教員の多忙化に加え、海外にルーツを持つ児童生徒や個別支援を必要とする子どもが増えている。こうした状況に対応するには、教員が一人で抱えるのではなく、多様な視点を持つ人が学校に関わることが求められる。私が経験した海外の日本人学校や日本語センターでの活動は、日本語教育への理解を深め、背景の異なる子どもたちを支える上で大きな学びとなった。今後は、この経験を大学の学びと関連づけ、海外での教育ボランティアを継続的に進める制度の可能性を大学とともに検討していきたい。

この課題について検討していくこと、その考えを組織となる大学などとともに実現に向けて取り組んでいくことがドイツで学んだ社会に「参画」することであると思う。ドイツで学んだ学びをこれからの私の活動に活かしたいと強く思う

■ 全体を通して今後行いたいこと(200字以内)

今後は教育現場において、ドイツでいいなと感じたことを積極的に子どもたちに還元したい。「余白」についてもこの研修で感じる事ができた。詰込み型の学習ではなく、実際に自分たちが経験したようなワークショップのような体験を授業などで取り組みたい。

日本とドイツの比較を行い、どのようにして教育現場で「余白」が生み出されていくのかについて調査し、教員の労働環境の改善にも解決策を見出したい。

■氏名 大谷 理化

■勤務先(役職) 大阪大学大学院 国際公共政策研究科 博士前期課程 比較公共政策専攻

■現在の仕事内容 (50字以内)

一般社団法人 NO YOUTH NO JAPAN シンクタンクチーム理事。若者の政治参画をテーマに、調査活動を行う。

■ ドイツで学習したこと (600字以内)

テーマ「若者の社会参画」

私は、ドイツで「よりよい社会をつくるための手段がいかに多様であるか」を学びました。ここでのよりよい社会とは、若者の社会参画が促進された社会のことであり、若者が自分の思うよりよい社会に向けて行動ができる社会のことでもあります。滞在中は、青少年援助を行う連邦・州・自治体レベルの各団体、学生ボランティア団体、博物館など歴史関係施設に訪問、懇談する機会がありました。それぞれの機会では数えきれないほどの学びがありましたが、どこでも共通していると感じたのは「自分達で社会をつくる」という意識です。どの団体も施設も、自分達が社会において果たすべき役割、影響を与えられる範囲についてよく理解し、自信をもって話していた姿が印象的でした。また、同時に、社会をつくるうえで色々な手段があることを理解し、自分達の目的達成のために最適だと思われる手段を選択していました。このように、よりよい社会づくりに向けた参画の手段を構造的に理解することは、自分達の役割を明確に認識し、社会参画に対する肯定感や実感を高めることができるため、非常に有用だと思いました。また、立場が明確になることは、各団体・各個人の相互連携を促進することにも繋がります。したがって、私はドイツにおける包括的な社会参画構造について深く学ぶことができました。

■ ドイツでの学習を、どのように活かしたか。(1,000字以内)

ドイツでの学習は、主に二つの場で活かされています。

一つ目は、非営利団体での活動です。私は現在、一般社団法人 NO YOUTH NO JAPAN の理事として、日本における若者の政治参画を促進する活動に取り組んでいます。リーダーを務めるチームの内部での取り組みで、現在、デンマークの若者団体のビジョンと取り組みについて学ぶ勉強会を開催していますが、勉強会では、他国の事例を通じて日本における若者の社会参画を取り巻く構造を理解するという意識しており、まさにドイツで各団体から学んだことが活かされています。また、勉強会の時には、ドイツで学んだ事例を私が紹介し、取り上げる機会も多くありました。さらに、理事として活動するなかでは、組織の今後の方針について考える機会も多くあります。その際には、自分達のビジョン、果たしたいミッション、そのための手段を意識して考えるようにしています。また、ひとえに若者の政治参画といっても、様々な関わり方があることも学んだので、自分達ができること、すべきことは何かを、以前よりも深く考えるようになりました。団体のメンバーにドイツでの学びを共有し、ドイツ研修の成果が自分から他者に広がっていく様子をまさに経験しています。

二つ目は、戦争ドキュメンタリー映画の上映会の開催です。今年の12月13日に、所属する大阪大学で上映会の開催を予定しています。ここでは、戦後も中国に残留した元日本兵の方のドキュメンタリー映画を上映し、監督とともに戦争についてのディスカッションをする予定です。私は、現在、この上映会の運営リーダーを務めており、上映会当日に向けた準備や告知を進めています。先ほどは書けませんでしたでしたが、ドイツで主に学んだことの一つに、歴史の加害・被害・抵抗の三つの側面を伝える、記憶する、行動するということがありました。これは、ドイツが過去に起こした歴史の加害、被害、そして抵抗のすべての側面について、記憶し忘れないための取り組みを充実させていると知ったことによるものです。ドイツでのディスカッションを経て、日本では確かに戦争の被害の側面に注目し、あまり加害や抵抗のことを伝えられていない・考えられていない現状があると思いました。そのため、身近な一歩として上映会を企画しました。当日は60人以上の参加者と戦争について話し合う予定です。

以上が、ドイツでの学習の活かし方です。

■ 全体を通して今後行いたいこと (200字以内)

今後は、卒業後の就職先でドイツ研修の学びを発展させたいと考えています。就職予定のシンクタンクでは、官公庁から現場支援まで様々な立場で社会課題に取り組む方々と関わる機会があります。その際、立場の違いをよく理解し、協働のために必要な政策を深く考えることを意識したいです。また、可能であれば、自らプロジェクトを発足し、若者の社会参画についての調査活動をプロジェクトリーダーとして担いたいです。

■氏名

関根 伶太郎

■勤務先(役職)

大宮国際中等教育学校 (高校2年生)

■現在の仕事内容(50字以内)

国際ふれあいフェアの運営、荒川太郎右衛門地区の環境保護、子ども食堂「和笑ひろば」の広報ボランティア

■ドイツで学習したこと(600字以内)

テーマ「若者の社会参画」

ドイツ訪問を通じて学んだ「若者の社会参画」の最も重要な点は、若者が単なる意見表明者ではなく、実質的な意思決定者として位置づけられていることだ。多くの自治体に設置されている若者議会では、14歳から21歳程度の若者が選ばれ、地域の一部について使途を決定する権限を持っている。訪問先では、若者議会の提案が実際に実現されている様子や実例を教授してもらい、「参加すれば変えられる」という成功体験が次の参画意欲を生む好循環が形成されていた。また、教育現場でも政治教育が必修科目として位置づけられ、ディベートやロールプレイを通じて対話と合意形成を体験的に学んでいることを知った。これらの成果として、ドイツではNGOやNPOへの若者の参加が活発であり、社会参画が大学のカリキュラムに組み込まれるなどが挙げられ、理論と実践が結びついている。企業でも年齢に関わらず若手が経営会議に参加し、新規事業を提案できる文化があることを知れた。総じて、ドイツのボランティア団体等は、社会参画が「望ましいこと」とされながらも、実際の意思決定権を持つ機会は限られているような日本の形式的な諮問機関ではなく、実質的な権限を持てる仕組みの構築、体験的な民主主義教育が充実していると考えられた。そのため、日本では、世代を超えた対等な対話の文化醸成が急務であり、帰国後はこの経験を活かし、地域での若者参画促進に貢献していきたい。

■ドイツでの学習を、どのように活かしたか。(1,000字以内)

ドイツでの学びは、帰国後の三つの活動領域に大きな変革をもたらした。

環境保護のボランティアでは、環境保護を「自分ごと」として捉える姿勢に感銘を受け、特にブントユーゲントでの世代を超えた協力体制は印象的であった。この経験を活かし、地域固有種の保護活動に「対話の場」を組み込みこむことを提案し、ボランティア参加者が環境問題について語り合える時間を設けることで、活動の意義を深めた。次に、子ども食堂のボランティアでは、ドイツの福祉で学んだ「尊厳を守る支援」の理念が運営方針の見直しにつながった。現地では、支援を受ける人々がそれぞれの強みを活かして活動に参加する仕組みが整っており、この発想を取り入れ、子どもたちが調理の手伝いや配膳に参加できる機会を増やした。年長者が年少者の世話をする「バディ制度」を導入し、子どもたち主体で活動に貢献することによる自己肯定感を育むことを重視するような形態に子ども食堂を変えるチャレンジを実践した。さらに、ドイツで目にした多文化共生の食卓から着想を得て、年に数回「世界の料理デー」を開催することを考え、様々なルーツを持つ家庭の料理を紹介することで、多様性を自然に学ぶ場を創出できるよう現在も努めている。最後に、国際ふれあいフェアの学生リーダーとしては、ドイツでの異文化交流プログラムを通じて学んだ「違いを楽しむ」姿勢を活かし、言語や文化の壁を感じながらも、共に活動し、意見をぶつけ合う中で真の相互理解が生まれることを実感した。この経験を踏まえ、従来の文化紹介ブースに加え、参加者が共同作業を通じて交流できる「体験型交流」のワークショップを充実させた。総じて、これら三つの活動に共通するのは、ドイツで学んだ「参加型」「対話重視」「多様性の尊重」という価値観であり、単に知識を得るだけでなく、現地の人々と実際に交流し、協働する中で体得したこれらの視点は、地域社会をより包摂的で持続可能なものにしていく原動力となっていくと考えられる。そのため、日独交流事業での経験は、異なる文化や背景を持つ人々が共に生きる社会を実現するための具体的な方法論を私たちに示してくれた。この学びを今後も実践し続けることで、地域に根ざした国際理解と社会貢献の輪を広げていきたい。

■全体を通して今後行いたいこと(200字以内)

ドイツで学んだ価値観を、自身の活動領域を超えて広げていきたいと考えている。具体的には、各分野で活躍する人をつなぐネットワークを構築するプロジェクトを立ち上げたい。例えば、多文化共生と環境保護を融合させたコミュニティガーデンの運営や子ども食堂と国際交流を組み合わせた多世代交流の場づくりなどの包摂的なモデルを日本の文脈に合わせて実践し、持続可能で誰もが躍進できる地域社会の構築・実現に貢献していきたい。

■氏名 中田 さや

■勤務先（役職） 岡山県立倉敷天城高校2年

■現在の仕事内容（50字以内）：

学生団体 Learn Link で高校生と地域をつなぐボランティアや多世代交流の場づくりを行っている。

■ ドイツで学習したこと（600字以内）

テーマ「若者の社会参画」

私がこの事業に参加して気づいたことは、ドイツでは幼少期から社会参画をする機会が多いということです。家庭や学校など日常の中で、自分で決め、それを他の人に伝えるという経験が当たり前組み込まれていて、幼い時から自分の意見を持つことが求められる教育だと感じました。

一方、日本では、自分の意見を持つことは大切だという認識はあるものの、実際には、学校教育の中で他の人に合わせることを求められる場面が多いことを実感しました。他人と違う意見を言うことへの抵抗感、周りに合わせることを重視する文化が、自分の意見を持ち発言することを難しくしている。結果的に、社会参画に対するハードルを作っているのではないかと思います。

ドイツで印象的だったのは、草の根レベルで国民一人一人、子ども一人一人の発言が求められ、尊重されていることです。この事業に参加する前は、社会参画とは他の人を巻き込んで大きなことをすることだというイメージがありました。しかし、決してそれだけではなく、小さな一人の存在でも、声を上げることでその輪が少しずつ広がっていく。そして、この「私にもできることがある」という感覚こそが、社会参画の第一歩であると思いました。

日本でも、私たち一人ひとりが声を上げることで、少しずつでもその環境を整えることにつながる。そう思えるきっかけや環境を作ることで、日本の若者の社会参画につながるのではないかと思います。

■ ドイツでの学習を、どのように活かしたか。（1,000字以内）

私が特に興味を持ったのは、高校生の社会参画です。研修前は「受験で忙しい」「時間が足りない」といった理由で高校生の参加が少ない現状に直面していました。一方、ドイツでは、若者が社会に関わるのが日常的であることに違いを感じました。ドイツで特に印象に残っているのは、ナチス時代の「抵抗」に焦点を当てた歴史教育です。ドイツでは、なぜ抵抗が必要だったのか、なぜ多くの人々が抵抗しなかったのか、与えられたことを疑わない危険性が重視されていました。また、日常の中で「ルールを自分たちで作る」経験が組み込まれていました。家庭や学校で、自分で決め、それを発表することが幼い頃から求められている文化。これらには、「当たり前を疑う」と言う共通点があると感じました。

一方、日本では社会問題について学ぶ時、教科書や課題を通して知識を得ることが多く、自分の身近な体験と結びつける機会が少ないと感じます。そのため、「課題だから学ぶ」と言う形になりがちで、ドイツのように日常の違和感から自然に学ぶ環境とは少し異なります。

この違いの根本にあるのが、批判的思考力ではないかと考えました。ドイツでは、この力が日常の中で自然に育まれています。だから社会問題を自分ごととして捉えることができ、社会参画が当たり前の選択肢になります。一方、日本ではこの力を育てる機会が不足しています。だからこそ、社会参画が「特別」なものになってしまうと考えました。

この気づきをもとに、私は学校で研究を始めました。テーマは「社会への違和感を育てる～地球の課題を自分事として捉える体験型学習の提案」です。生活の快適さが保証された日本社会では、地球課題への危機感が薄れ、社会問題を「自分ごと」として捉えにくい環境があります。そこで、まず自らの当たり前を疑う視点を持ち、内発的な気づきから身近な社会課題への意識を持つこと、そこから視野を世界の課題へと広げるための力として批判的思考力を育成する体験型学習プログラムを提案しました。そして、批判的思考力の育成が本当に若者の社会参画につながるのか、という仮説を検証しています。また、その成果を2025年12月の全国高校生フォーラムで発表する予定です。

この研究を通じて、ドイツで学んだことを日本でどう実践できるかを模索しています。

■ 全体を通して今後行いたいこと（200字以内）

このプログラムを通して私が今後取り組みたいことは、自分にできる一歩を積み重ねることです。ドイツで学んだ、「一人ひとりの小さな参画にも意味がある」という考えが、特に印象に残っています。これからは議論の場でも他人に任せるのではなく、自分の言葉で意見を伝えることを恐れずに行いたいと考えています。そしてその小さな行動を積み重ねることで、周囲にも良い変化を生み出せるようになりたいです。

■氏名 林 菜摘

■所属団体 一般社団法人 THYME

■現在の活動内容 (50 字以内) 性暴力被害後の回復を支援するための情報発信と中長期的な心理サポート、必要な支援の情報提供

■ ドイツで学習したこと (600 字以内)

テーマ「若者の社会参画」

ドレスデン工科大学政治学研究所でのゲーミング体験では、戦時中のメディアが人々の判断や感情に与える影響を疑似体験した。過激な写真を撮らなければ進めず、情報が人々の行動に強く印象を残し、刺激してしまう可能性があることを実感した。現代の SNS やニュースも同様に、私たちの判断に影響する情報が自身で選んでいるように選ばれている。例えば、自分が興味あるものを見ていたとすれば、自分の使っているアプリは、自分にしか興味ないものしか出てこなくなるよう仕組まれている。また、私たちが見るニュースや映像は「既に誰かが切り」撮ったもの」と話した大学院教授の話が印象的である。

ブント・ユージェントやザクセン州青少年連合との議論を通じ、ドイツでは 27 歳までが青少年であり、年齢に関係なく社会参画できることを学んだ。TUUWI では、「学生が大学に管理される側」ではなく、「大学を形成する主体」として批判と対話を通じて制度改革を実現し、抵抗運動から協働へ環境問題に取り組んだ過程は、学生自治と民主主義の可能性を示している。ラーヴェンスブリュック強制収容所やベルリン市内の歴史施設の見学では、歴史が単なる知識ではなく、個々の命や権利に直結して残され、記録されていることを体感した。これらの体験を通して、情報を取捨選択する力と受け入れない力、社会参画の重要性を同時に学び、自分の考えを持って行動することの大切さを強く認識した。

■ ドイツでの学習を、どのように活かしたか。(1,000 字以内)

私が本研修で強く感じたことは、歴史教育の意義と、不当な事柄を無批判に受け入れない姿勢の重要性である。日本の歴史教育は暗記中心で、被害の側面が強調される傾向がある。一方、ドイツでは加害の歴史に正面から向き合い、なぜその過ちが起きたのか、再発を防ぐために社会として何が必要かを考えさせる教育が行われている。歴史もまた、現在と未来、社会や自分自身の行動を考えるための学問であると理解するに至った。

また、日本では加害の歴史を深く扱う機会がほとんどなく、「自分の頭で考え、向き合う姿勢」が育ちにくい。社会問題への向き合い方にも影響していると感じた。慰安婦問題や性暴力、ルッキズムといった課題に対し、表面的な理解にとどまりやすい背景には、人を「消費の対象」として扱う文化と、加害者側の責任を考える視点の不足が、温存されやすくなるのではないかと感じた。ドイツの教育現場から、被害者支援と同時に、加害の構造を理解し責任を問う仕組みの重要性を学んだ。日本が被害者のみにカウンセリングがある状況が続くままでは変わらないのではないかと。

ラーベンスブリュック強制収容所や抵抗記念館の訪問では、権力への服従が社会をいかに歪め、人権を奪っていったかを知った。不正や差別に対して沈黙せず、「間違っている」と表明し、受け入れない選択をした人々の行動が、現在の自由や人権の基盤を築いていることを実感した。現代の若者が社会に参画するうえで最も重要な態度の一つだ。

これらの学びは、私自身の行動や判断にも反映されている。日常生活において理不尽さや不誠実さを感じた際、違和感の背景を考え、必要に応じて距離を置く選択を行うようになった。また、広告や SNS などの情報についても、その意図や影響を意識し、無批判に受け取らない姿勢が身についている。本研修で得た「受け入れない力」は、声を上げることだけでなく、選ばない、関心を向けないという「静かな抵抗」と、「主体的に選択し行動するための基盤」として、私の生き方に根付いている。自分の尊厳と境界線、未来を守り不正を広げないための姿勢こそが、社会をより良くする一歩になるはずだ。

■ 全体を通して今後行いたいこと (200 字以内)

海外に出て海外の人の生き方、考え方に触れる経験は自身が経験してこなかったそれぞれの人の立場や考えを理解し、柔軟に考える力を身につけるということにもつながる。また、ドイツの方とのご縁を活かし、対面やオンラインで日本・ドイツの人たちをつなぐ架け橋として歴史や文化の違いについて交流し合う企画や展開し、ワークショップや理解を深め合う場をつくりたい。そして、歴史教育の場で事実をただ知識として覚えるのではなく「なぜ起きたのか」「自分ならどう関わるか」を考えることを後の世代に意識して伝えていきたい。

■氏名 林 李子

■勤務先（役職） 叡啓大学4年

■現在の仕事内容（50字以内） 通信制高校でのTA 業務／広島への復興展示スタッフ

■ ドイツで学習したこと（600字以内）

テーマ「若者の社会参画」

日本とドイツは、少子高齢化や地域格差といった共通の課題に直面しているが、その向き合い方には違いが見られる。ドイツは育児支援や住宅補助など、若者や子育て世帯を制度として支える仕組みが比較的整っており、再統一後の地域再生政策など社会的連帯を軸とした取り組みが進んできた。一方日本では、医療アクセスなどの強みはあるものの、行政手続きの煩雑さや支援の利用に伴う心理的抵抗が課題として残る。また東京一極集中が続き、地方の雇用や暮らしの不安定さが若者の流出を加速させている。こうした状況を踏まえると、日本には制度的な安心感を強め、社会全体で若者・子育て世帯を支えることが求められているのではないかと考える。

社会教育の面でも両国には違いがある。ドイツでは社会奉仕活動年（FSJ）など、若者が学校卒業後も社会と関わる仕組みが制度として整っているほか、自らルールを作り責任を持つ教育が主体性や民主的価値観の育成につながっている。対して日本ではギャップイヤーや休学等の取得も広まってきているものの未だ主流ではなく、またボランティアが個人の善意に依存しやすく、長期参加を支える制度や評価が弱い。また SNS の普及により情報取得は容易になったものの、偏った情報環境に陥るリスクも高まっている。ドイツで重視される批判的思考を育てるメディアリテラシー教育は、日本だけでなく両国にとって今後ますます重要となる課題であると考えます。

■ ドイツでの学習を、どのように活かしたか。（1,000字以内）

ドイツでの研修やドイツ団との交流を通して、私は自分の学び方や人との関わり方に大きな変化を感じている。特に、議論の場での姿勢はドイツに行く前と比べて明確に変わった。ドイツ団の方々は、意見を述べることに對する心理的ハードルが低く、自分の考えをとにかく言語化して共有する姿勢が印象的だった。もちろん彼らも必ずしも自分の意見がまとまっているわけではないが、「とりあえず話してみる」という発散的な姿勢が、ごく自然に受け入れられている文化があった。

日本の学生は、意見を述べる前に「正しくまとめなければならない」という意識が強く、私自身もその一人だった。しかし、ドイツ団たちと議論する中で、意見をまとめる力だけでなく、考えがまとまっていない段階でも声に出し、他者の意見とぶつけながら形にしていく力も同じくらい重要なのだと実感した。この点については日本団のメンバーとも話し合い、「教育の違いが姿勢に表れているのではないかと」という気づきにもつながった。

その経験以降、ゼミや授業でディスカッションをする際、私は以前よりも積極的に意見を口にするようになった。完璧である必要はなく、とりあえず出してみることで場を動かし、他の人の考えと組み合わせながら深めていく。その姿勢の変化は、自分自身の学びの質を高める大きな一歩になっていると感じる。

また、現在私が行っている通信制高校でのティーチングアシスタント（TA）活動にも、ドイツでの学びは生きている。ドイツでは「社会奉仕活動年（FSJ）」のように、若者が自分の将来や社会との関わり方について考える機会が制度として用意されている。そこで出会った多くの学生は、自分が何をしたいのか、どう社会と関わりたいかについて真剣に向き合っていた。その姿を見たことで、私自身も「高校生が悩むのは当然で、その先にはいろいろな道がある」という視点を持てるようになった。TA として生徒と接する際にも、彼らが抱える迷いや不安を否定せず、選択肢の広さを一緒に考える姿勢を大切にできるようになった。

この二つの学びを基盤として、今後も他者と共に考え、若い世代を支える関わりを続けていきたい。

■ 全体を通して今後行いたいこと（200字以内）

これまでの学びを通して得た「自分で問い続ける姿勢」と「異なる価値観に開かれる態度」を、これから基盤として大切にしたい。進む道がどんな分野であっても、状況をそのまま受け取るのではなく、一度立ち止まって考え、自分の言葉で選択していく力が必要になる。周囲との対話を重ねながら、自分の頭で考えた判断と行動を積み重ねていく生き方を目指したい。

■氏名

藤田星流

■勤務先(役職)

中央大学法学部(学生)、認定NPO法人カタリバ(非常勤職員:文京区青少年プラザb-labスタッフ、中野区若者育成支援事業受託事務局)、主権者教育団体Vote at Chuo!!(代表)、合同会社ぱとん(代表社員)

■現在の仕事内容(50字以内)

学校や居場所施設、連続型イベントにおける、子どものエンパワメント・市民性向上に向けた施策検討、実践。

■ドイツで学習したこと(600字以内)

テーマ「若者の社会参画」

今回のドイツ派遣では、ドイツの若者の"社会"との距離感や未来に対する意識の日本との違いについて学習し、団員同士の意見交換を通じてその要因について考えることができた。

特に印象深かったのは、強制収容所跡地で実施した日独合同セミナーである。負の歴史と向き合い、現代の社会課題を議論する中で、過去を学び問い続ける続ける責任こそがドイツ社会への市民参加の原点にあると実感した。ドイツの若者はそれを家庭、学校、地域等様々な場面で多様な経験を通してある種の実学として学んでおり、その意識が日常生活と連動している点について驚いた。

団員同士での意見交換を通じては、社会や過去に対する日本とドイツの若者の意識の差は、日独の学校教育の違いによるものであるという共通認識が生まれた。また、個人的にはBUNDjugendやtuuwiへの訪問を通じて、政策の意思決定過程に若者が存在していないことなども重要な課題であると感じたが、我々が受けてきている学校教育に対する課題の指摘は容易である一方で、これまで関わりがなく既に制度や慣習が整っている社会制度等について課題を指摘することは、高度な知識と批判的思考がないと難しい。この、既存の社会制度等についても広く学び検証を繰り返し常にアップデートし続ける文化も、ドイツでは当然のように存在しており、若者の社会参画の推進には子ども若者への教育だけでなく、全世代への啓発を含めた機運情勢が必要なのだらうと考えた。

■ドイツでの学習を、どのように活かしたか。(1,000字以内)

ドイツで得た最大の気付きは、社会参画とは「学び、声を上げ、対話し、変える経験の積み重ね」であるという点である。BUNDjugendやDynamo Dresdenのファンプロジェクトでは、若者が単なるサービスの受益者ではなく、社会を構成する対等なパートナーとして扱われていた。日本では長い間子どもを保護の対象とした政策が行われ、こども基本法施行によってようやく子どもが「保護の対象」から「権利の主体」へと移り変わりつつあるが、育成する対象でもあり主体的に行動する個人でもあるというアンバランスさが具体的な施策に落とし込む障壁にもなっている。一方ドイツでは、「主体的に行動する個人たる子ども」を後押ししてこそ、育成(ないしは成育)につながるという認識が基盤となっているため、若者がチャレンジをして成功体験や失敗体験を積み重ねるフィールドが多く存在していた。

これらのことから、私が従事する中高生の居場所施設において、まずは真の意味で主体としてチャレンジができる制度設計に向け、そのミッションの担当職員として実践を始めている。当該施設では、これまでも中高生を主体とした運営に重点を置いてきたが、目先の効率のためにスタッフ間での先回りした意思決定や歯止めが存在していた。しかし、施設のルールメイキングやイベント運営において、スタッフが主導権を手放し中高生自身が議論し決定するプロセスを徹底して保障することで、自分の意見が反映され、あるいは対話によって妥協点を見出すことを経験でき、そのプロセスこそがドイツの若者が持っていた市民性の種になると確信し、実装に向けて調整を行なっている。

また、別の団体で学校現場にて行っている主権者教育授業も、本事業を通して学び考えたこと踏まえてデザインし直しているところである。日独合同セミナーでは、ドイツの若者が正解のない問いに対して歴史的背景や制度の矛盾を踏まえながら批判的に議論する力を養っていることを痛感した。総務省が推進する主権者教育は選挙制度の仕組みや投票の手順に重きを置いており、私の所属する団体ではより踏み込んで生徒同士の対話を重点に置いた授業設計を行っている。しかし、ドイツで学びを生かしてさらに踏み込み、自治体の施策や国政政治あるいは若者が不在とされている政策決定プロセスそのものを題材にし、中高生自身が自ら問いを立て批判的に思考することのできる実践に向けて、NDCで学んだ手法も参考に検討を進めている。

■全体を通して今後行いたいこと(200字以内)

今後は、子ども若者に社会参画を促すだけでなく、社会の意識変革にも取り組んでいきたいと考えている。来年度からは文京区の審議会の委員やNPO法人の代表理事を務める予定であり、私自身も一人の若者として政策決定や社会実践の場に参画し、多様なフィールドを持つ強みを活かして対等に議論を重ねることで既存の閉塞感を打破し、後に続く子ども若者が当たり前社会参画できる土壌を切り拓いていきたいと考えている。

■氏名 細谷彩羅

■勤務先(役職) 一般社団法人 Japan Education Lab (学生ボランティア)、図書館学生団体 BiVS (メンバー)

■現在の仕事内容 (50字以内)

高校の探究学習を支援するファシリテーター、および大学図書館の企画・運営メンバーとして活動。

■ドイツで学習したこと (600字以内)

ドイツでは、「若者の社会参画」が善意の余暇ではなく公共の基盤として位置づけられ、それを支える仕組みが体系化されている点に感銘を受けた。

特に、失敗を許容する文化と決定過程への参加権の保障が、若者の主体性を育む鍵だと認識した。日本の学校教育が正しい選択をすることに囚われ、見せかけの参画になりがちで、「失敗を前提にした自由」がほとんどないのに対し、ドイツでは、若者が民主的プロセスを経験できる実験の場や練習の機会が重視されていた。

また、社会参画について、ドイツでは熟練者が判断と安全管理のコアを担い、若者の専門性を組み合わせる参画する枠組みを提案するという考え方にも触れた。これは、ボランティア活動が「自己実現の機会として大切にされている」というドイツの価値観や、民間団体の独立性が高い援助構造と密接に関連していると感じる。さらに、市町村単位での青少年参画の枠組みが法律で定められ、遊び場や公園のデザイン、青少年市町村会議などで実践されている具体例から、若者が「決定にかかわり、責任を担う」意欲を引き出すことで「民主主義疲れ (Demokratiemüdigkeit)」を予防するという意識を強く学んだ。

■ドイツでの学習を、どのように活かしたか。(1,000字以内)

1. ドイツでの研修は、若者の社会参画の根底にあるべき「対話の文化」と「当事者意識」の重要性を体感させ、ゼミの専門である哲学の領域に応用され、議論を深化させた。
具体的には、強制収容所跡地やベルリンの壁記念碑の視察を通じて学んだドイツの負の歴史との向き合い方や、「記憶の永続化」の姿勢をゼミ発表で扱い、議論の機会を設けた。その結果、ゼミでの歴史認識や平和教育に関する議論が、被害者・加害者の二項対立を超え、「当事者意識」と「倫理的責任」の観点から深まった。これは、対話を通じた自己の偏見やステレオタイプの乗り越えを再認識する機会となった。
2. 研修で学んだ「参画とは、協働決定権があること」という定義と、若者の参画を促す「失敗を許す文化」を学内活動で実践した。
図書館学生サポーターの企画運営において、学生ボランティアの活動を単なる作業参加ではなく、「決定にかかわる」参画とするため、広報企画の立案と実行権限を学生に委譲するように調整した。その結果、学生サポーターは「自分の活動は日常生活を彩るものだ」というマインドを共有し、企画への主体的な関与が高まった。今後は、ドイツの若者の環境問題への関心の高さから、異文化間の政策決定の背景を多角的に理解するために履修している「環境政策論」や「産業政策論」にて学んだ「将来世代の幸福の考慮」や「地球環境問題と産業」という政策課題を題材に、JEL (探究学習ファシリテーター) 活動のワークショップ内容を更新する予定である。これにより、高校生が自分ごととして社会課題に取り組む内発的な動機付けを促す。
3. ドイツで学んだオープンな対話姿勢を、帰国後のゼミや他授業のグループワークで率先して実践するように意識している。これは、参加者間で高低差の少ない対話環境を築き、多角的な視点から議論を深めるためだ。この姿勢を活かし、JELの活動においては、高校生や学生が大人に頼らず、自分ごととして課題に取り組む当事者意識を育むことに注力している。

■全体を通して今後行いたいこと (200字以内)

ドイツにて得られた知見である「協働決定権」と「失敗を許す文化」を、日本の学校・地域社会に導入するための具体的な提言と実践を重ねていく。特に、若者が政治や社会課題を「自分ごと」として捉えられるよう、議論に基づく政治教育の手法を積極的に活用したい。また、ボランティア活動を通じて、本事業について高校生や大学生に周知を促すことで、若者の社会参画の輪をより広げていきたい。

■氏名 松野愛

■勤務先(役職) 東京大学(大学生)

■現在の仕事内容(50字以内) 学生

東京大学学生団体 FairWind/東京大学学生団体 ichihime/NPO 法人 マナビファクトリー/東京大学学生団体 FICS

■ ドイツで学習したこと(600字以内)

テーマ「若者の社会参画」

ドイツでは幅広いテーマで様々な観点からドイツ社会及び日本社会について再考する機会を得た。総じて感じたのはドイツ社会は一人一人の生活や幸福を大切にしていることであり、依然として集団主義が残る日本社会とは対照的であった。環境や歴史教育、ボランティアへの支援において若者の意見を取り入れたり、若者に社会について考える機会を提供したり、社会の重要な構成員として迎えている印象を受けた。また環境や歴史認識においても当事者意識を持つことを大切にし、若者に考えさせ、体験させることで関心を失わせないように努めているように感じ、そうすることで若者の自身は社会の一員であるという自覚が生じ、議論を活性化させるのだと思う。また、みんなが納得するルールを模索したり、個人の事情に配慮しながら活動を進めたりする様子を見て、他者を尊重しながら自分の当たり前を他者に強要しない姿勢や多様性を受け入れる社会的な雰囲気を感じた。また、日本ではボランティア活動は時間やコストの観点から継続が難しい場合も多いが、ドイツでは自発的社会活動年など若者のボランティア参加を支える制度が体系化されており、個人個人の善意に委ねず、他の活動で忙しい若者でも継続しやすい体制の構築に努めている点が非常に勉強になった。

■ ドイツでの学習を、どのように活かしたか。(1,000字以内)

ドイツでは、経済的支援を行いながらも団体の活動に干渉しない仕組みや、他の活動との両立を可能にする「自発的社会活動年」など、個人の持続可能なボランティア参加を後押しする制度が整備されていることを感じた。この点を学び、私が携わるボランティア団体でも、各メンバーの負担を軽減するために、活動頻度の調整やタスクの分散、個人ではなくチームで取り組む場面を増やすなど、可能な範囲で体制整備を進めた。

また、当然のことながら、参加はあくまで自発的なものであり、義務感や束縛感を抱かずに関わられるよう、その点についても周知を図った。経済的な支援も不可欠であり、時間や資金も限られている学生への支援として交通費の支給や謝礼の導入も進めている。これにより、活動への心理的負担が軽減され、活動の継続率や満足度が向上しているように感じる。

環境問題への姿勢も大きく変化した。視察したドイツの大学生たちは、環境問題を遠い社会課題ではなく、自分の生活に密接に関わる問題として語っていた。その姿勢に影響を受け、帰国後は団体内で環境問題に関する勉強会やディスカッションを定期的で開催する企画を立ち上げた。参加学生が自分の生活と社会課題を結びつけて考える場をつくることで、環境意識の共有と新しい企画の創出につながっている。

また、個人個人の意見を尊重し、各人の事情に配慮する文化や雰囲気が強く感じられた。学生同士のディスカッションやボランティア活動の場でも、一人一人が自分のペースで発言や参加ができるよう配慮され、個人の立場や状況が無理なく尊重されていることが印象的で、社会活動やボランティアにおいては、単にルールやスケジュールを押し付けるのではなく、個人の意見や事情を理解し、柔軟に対応することが重要であると学んだ。

この学びを踏まえ、帰国後に関わる子ども食堂や居場所づくりの活動においても、子どもたち一人一人の声や事情にできる限り配慮することを心掛けるようになった。例えば、活動の際には、子どもたちが「やりたいこと」と「できること」を自分で選択できる場を設けたり、体調や家庭の事情など個別の状況に応じて参加の仕方を柔軟に調整したりしている。また、子どもたちの意見を聞く時間を意識的に取り入れることで、活動に対する主体性や自主性を引き出し、彼ら自身が安心して居場所を利用できる環境づくりに努めている。

■ 全体を通して今後行いたいこと(200字以内)

ドイツの先進的な教育手法や当事者教育の考え方を導入し、若者の社会への関心や責任感を育み、社会参画を一層促進したいと考えている。また、若者が社会運動に対して抱きがちな抵抗感を和らげ、社会に対して主体的に行動を起こす姿勢を育てたい。

具体的には、学校教育では扱いにくいテーマを出張授業として届ける取り組みや、学習指導要領の改訂に携わり、社会への関心を促す内容を盛り込むことが有効ではないかと考える。

7. 成果と課題 (団長 生田周二：奈良教育大学 特任教授)

はじめに.....社会参画の日独比較

- 研修先の機関・団体への訪問、ドイツ団などとの交流、ホームステイ、自主的な研修活動などを通じて、社会参画について考え合う機会となりました。とりわけ、その背景となっている歴史や文化、制度的な違いを踏まえて、日本における課題を重層的な視点から整理することができました。
- 議論の仕方や整理の仕方についても、ドイツ団との交流の中で刺激を受けて、自分の意見をきちんと出し合いながら、他者の意見なども参考に修正していくことの重要性も学ぶことができました。
- ほぼ毎日行った団員を中心とするミーティングにおいて、積極的に議論を積み上げていながら、最終発表会につなげることができました。

1. 学び

- 社会参画**：テーマの社会参画について、経済・福祉、加害と被害、抵抗と責任、若者の参画と社会教育、政治との関わりという重層的な視点から捉え返すことができました。これらの視点は、最終発表会に反映されました。

初日の日独センターでの研修において、参画における定義「決定過程と意思形成過程に参加する」が示され、参画の段階モデル「みせかけの参画→参加→共同決定→自治」として整理されました。

また、参画を具体的に身近な生活世界から捉え返し、家庭、保育・学童保育施設、学校、地域のクラブや団体における参画と自己決定、それを受け容れる環境の重要性を考え合った点も分かりやすかったと言えます。

この点は、ドレスデン工科大学での政治教育の説明において、政治を広く捉える必要性が語られていた点とも通じます。そこでは、政治は選挙や政治家の活動、国家の仕組みだけではなく、家族、恋愛関係、学校、地域活動などにおいて自己決定していける環境にあるのか、またマスメディアや SNS を通じて考えが操作されていないかなど、日常生活のあり方から考えていくことの重要性が指摘されていました。

- 参画に関わるドイツの制度**：ドイツでは、①社会法典第8編の法律(子ども・若者支援法)に基づき、27歳までの子ども・若者の自発的な活動を促進し、自立を支援する仕組みとして位置づいていること、②市町村自治体レベル、州レベル、連邦レベルでの三層の官と民の組織の枠組みが体系化されていること、③とりわけ多くの若者が社会活動や環境問題などへの関心から関連団体・施設の活動に参画する上で、その活動を支援する自発的活動年という制度をギャップ・イヤー (GAP-Year) として活用して、実体験しながら自己の進路を模索していることなど、日本との大きな違いを知ることができました。

子ども・若者の声やニーズの反映をサポートする子ども・若者コミッショナー (Kinder- und Jugendbeauftragte) の存在(ザクセン州など4州)、子ども・若者諮問委員会 (Jugendbeirat) の設置などは、日本でも取り組まれている自治体があり、子ども・若者の参画の具体化を進めようとしている点で共通点がありました。

また、社会全体の共通点として、少子高齢化の進行、都市と地方の地域格差、メディア情報などへの対応が求められています。しかし、ドイツの場合、そのあり方を検討するためにも子ども・若者の参画を意識的に取り入れようとしていると言えます。

- 民間公益団体**：今回訪問した民間支援団体である、ブント・ユーゲント (ドイツ環境自然保護連盟青年部)、

ドレスデン・サポータープロジェクト (Fanprojekt Dresden e.V.)、民主主義と勇気ネットワーク (NDC: Netzwerk für Demokratie und Courage)、ドレスデン工科大学環境イニシアチブ (トゥービー: tuuwi) は、環境保護、スポーツにおけるフェアプレー、民主主義と対話を考え合う公益的な活動の展開をしていることを把握できました。とりわけ、各団体が自発的活動年の若者を含め多様なボランティアの受入れを行っていることも印象的でした。その背景には、民間の公益活動を公的に保障する補完性原理 (Subsidiaritätsprinzip) に基づいて公的助成を得て活動の基盤としていることも重要な側面としてあります。日本は、NPO 団体などの民間の力を支援する仕組みが弱いことも見えてきました。

○**抵抗の視点**：ベルリン市内歴史研修ではベルリンの壁やナチスの歴史の克服を学び、ユースホテル内の「ラーヴェンスブリュック警告・追憶の場所」(女性用強制収容所跡) では加害と抵抗の歴史に触れ、ドレスデン旧市街見学では大空襲で破壊された建造物、とりわけ聖母教会(フラウエン・キルフェ)を、和解の歴史として復興を位置づけてきた話がありました。また、自主研修で、ナチスに抵抗した人物やグループの足跡を展示した「ドイツ抵抗博物館」などを見学して、新しい視点を得ることができました。日本では、こうした戦争や抑圧的な社会体制に抵抗した歴史を記録する博物館が少ないことが日本団でも話題になりました。歴史を繰り返さないために、所属している社会のあり方に責任を感じる感覚や、社会の一員としての思いや発想にいろいろ刺激を受けることができました。

とりわけ戦争への認識については、加害と被害の両面で語られることが多いですが、抵抗という視点は参画や意見表明を考える上で重要なファクターだと感じています。

○**全体として……批判と抵抗の視点、「未来に対する責任」**

参画について、日常生活と政治のあり方や仕組みを批判的に検討しながら意見表明し意志決定に関わっていくことが重要だという点、意見を相互に尊重しながら自由に交換し積み上げ自己決定を促していく民主主義的な対話が重要だという点、それを支える制度的な仕組みも必要だという点が明らかになったと言えます。

しかし、こうした点が日本社会ではなぜ展開しにくいのかという問いも重要です。日常の生活世界、家庭の中での会話、学校やいろいろな取組の在り方について、考えを深めていく必要があると言えます。日本における難しさの背景について、批判と抵抗の視点から捉え返すことの重要性が示されたと言えます。とりわけドイツ団との交流の中で、相手と違う考えや提案をするときに躊躇する、控える、「空気を読む」といった言葉に代表される傾向は、批判、自己決定、抵抗を十分に培ってこなかった日本の歴史的な背景があるのかもしれないという気づきにつながりました。これらの点を考えていくことが「未来に対する責任」とつながっているとと言えます。

このためには、日常的には情報を単に知識として覚えるのではなく、どう感じ今後の課題として考え合っていくのか、情報の獲得を受けて批判的に思考できる学習環境、その環境の在り方の検討を含めてニーズ、思い、意見を表現できる参画、問題があるときには異議申立や運動を起こすなど抵抗すること、これらが民主主義の展開にとって重要であり、「未来に対する責任」につながるとドイツに来て再度思いました。

2. 日本団の活動について

団員は、16 歳から 25 歳までの若者 9 名(高校生 2 名、大学生 6 名、大学院生 1 名)が、それぞれの多彩な取組を踏まえて問題関心を持って積極的に持ち味を生かしながら参画してくれました。また、団員全員が、

訪問先、ホストファミリーなどと英語でやりとりをしながら積極的にコミュニケーションを取ろうとしている姿も印象的でした。こうした中で、○自発的に意見を出し合うことができ、○相互に協力しながら役割分担をでき、○研修に向けての準備、ドイツでの研修、交流会や発表などをスムーズに進めることができたことにつながりました。

団長・副団長は、団員の取組をサポートするとともに、ミーティングなどでは一メンバーとして意見を出したり提案をしたりしながら、今回の交流事業を進行することができました。

以上の取組の中で、キーワードとしてよく言われる批判的視点や自己決定の重要性だけではなく、抵抗、「未来に対する責任」など新しい視点を得られたことが印象的でした。こうした機会を持つことができ、今回の訪問は大きな意義があったと言えます。

3. 謝意と課題

ベルリン日独センターならびにザクセン州青少年連合をはじめとする現地スタッフのみなさんのサポートが日本団の活動を支えてくれていました。ドイツでの楽しい時間を送ることができ、心から感謝を申し上げます。

その上で、検討課題として以下の点を挙げるすることができます。

- 地域の身近な青少年センターや児童館、居場所的な施設での参画やそこで活動するボランティアの様子も見ることができれば、日本には学校外で参画できる青少年施設や団体などが不足している点など違いがより明らかになったかも知れません。
- スケジュール的な問題はありますが、団員が自己省察できる時間的保障がもう少し確保されていることも重要だと感じました。自分たちが研修してきた省察を全体で行うことも重要ですが、個々に整理することも重要な点です。
- ドイツ側では、ベルリン日独センターをはじめとする現地スタッフや過去の交流事業参加者が、経験をつないでドイツでの日本団の研修をサポートしてくれていることが感じ取れました。日本では、国立青少年教育振興機構を中心に交流事業を展開していますが、関係する専門的人材の配置や養成を含めて検討する課題があると感じます。

受 入 れ 事 業 報 告

1. 参加者名簿

	氏 名	活動所属団体
		職業・教育課程
団長	ザシャー・クンマー	サッカークラブ ブルーイエロー・ベルリン
	Sascha KUMMER	公務員
1	シェリン・アハメド	Coexister Germany* *異なる信仰や世界観を持つ人々が協力的に共存することを目的として活動を行っている非営利団体
	Sherin AHMED	ソーシャルワーカー
2	ダニエル・ブラウン	ビーバラッハ市青年交流
	Daniel BRAUN	IT 担当
3	ヴィクトリア・ヘス	ドイツ・ライフセービング協会インゴルシュタット市青年部
	Viktoria HESS	大学生
4	ジェイミー・コレス	ベルリン 25 歳未満オンライン自殺予防相談（ベルリン大司教管区カリタス連盟）
	Jamie KOLLES	ソフトウェア・エンジニア
5	ダニエル・ナガイェフ	若者は語るー移民青少年団体 メクレンブルク＝フ ォアポンメルン* *若い移民難民の支援および差別に対する取り組みを行っている北ドイツの非営利団体
	Daniel NAGAYEV	大学生
6	アンジェリーナ・シャピロヴァ	ヨハネ騎士団災害支援・福祉事業
	Angelina SHARIPOVA	高校生

7	パスカル・ヴィーゼンバーク	青少年レジャー・教育技術系団体 (tjfbg)* *専門家の協力を得て様々なレジャーおよび教育活動を実施している非営利有限責任会社
	Pascal WIESENBERG	自発的社会奉仕活動年従事者
8	エマ・ヴォルフ	非営利団体 EuroYouth* *18歳～30歳までの若者を対象とした非営利の国際交流団体
	Emma WOLFF	青少年団体活動担当

人数について計画当初は団長含め 10 名の予定であったが、急遽団員 1 名がキャンセルのため、最終的な参加人数は 9 名となった。



日独学生青年リーダー交流事業ドイツ団（日本団とともに）

2. 日程

日付	場所	時間	プログラム
8月27日 (水)	ドイツ	午前	アムステルダム空港 発
8月28日 (木)	奈良	午前 午後	関西国際空港 着 奈良へ移動 オリエンテーション(曾爾プログラム)
8月29日 (金)	奈良	午前 午後	曾爾自然の家及び曾爾村についての概要説明 曾爾プログラム(木のスプーン・フォーク作り) ホストファミリー対面式 ホームステイ開始
8月30日 (土)	奈良	終日	ホームステイ
8月31日 (日)	奈良	午前 午後	ホームステイ ホストファミリー交流会 温泉体験 団ミーティング
9月1日 (月)	奈良	午前 午後 夜	訪問: 曾爾村立曾爾小中学校 訪問: 曾爾村学童保育 曾爾ボランティア交流企画
9月2日 (火)	奈良	午前 午後	体験: 曾爾プログラム(曾爾高原ハイキング) 体験: 曾爾プログラム(野外炊事) 意見交換: 曾爾ボランティアとのディスカッション
9月3日 (水)	奈良 東京	終日	東京へ移動 オリエンテーション(東京プログラム)
9月4日 (木)	東京 奈良	午前 午後	講義: 国立青少年教育振興機構 概要 子どもゆめ基金部国際・企画課長 林 潤一郎 氏 講義: 「若者の社会参画」 神奈川大学人間科学部 教授 齊藤 ゆか 氏 団ミーティング
9月5日 (金)	東京	午前 午後	訪問: 一般社団法人淡路エリアマネジメント 事務局 原田 賢治 氏ほか職員3名 訪問: NPO法人 iPledge 事務局スタッフ 山口 記世 氏ほか学生2名
9月6日 (土)	東京	終日	日独合宿セミナー(顔合わせ/ディスカッション) 歓送交流会
9月7日 (日)	東京	終日	日独合宿セミナー(ディスカッション/全体発表) 団ミーティング
9月8日 (月)	東京	終日	自主研修 団ミーティング/学習成果発表会の準備
9月9日 (火)	東京	午前 午後	学習成果発表会 自主研修
9月10日 (水)	東京 ドイツ	午前	羽田空港 発 → パリ国際空港 着

3. ダイジェスト

以下の目的の下、地方プログラムである曾爾滞在プログラムを実施した。

体験活動等の場面	ドイツ団の主なねらい
①指導現場・意見交換会、 歓迎・交流会ほか	地方施設で活動しているボランティアの実態等について学ぶ。
②日本文化体験 (地域伝統文化体験)	日本、地域の伝統文化や歴史を知り、体験を通して学んだことを今後の活動につなげる。
③学校・学童保育などでの 体験	共に学内外で活動する中で地域の子どもの実状を学ぶ。 過疎地域・曾爾において異文化紹介の機会をもち、曾爾村に貢献する。
④自然の家プログラム体験	日本の青少年教育施設で実施している活動や指導方法などを学ぶ。
⑤ホームステイ体験	日本の家庭ではどのように生活をしているのかを知り、文化や生活についての共通点や相違点を学ぶ。

< 8月28日(木) >

○居合道の練習見学 目的②

居合道の練習を行う学生団体が曾爾青少年自然の家を利用していた。当初は予定していなかったが、見学希望の了承を得ることができたため、居合道の剣術を披露していただいた。ドイツ団も日本刀の剣術を直近で見ることができた。青年団体との交流となる良い機会となった。



< 8月29日(金) >

○国立曾爾青少年自然の家 概要説明 目的④

曾爾青少年自然の家が行っている研修支援、教育事業、利用団体の状況を紹介した。国立青少年教育振興機構の地方施設の実態を学ぶ機会となった。



○曾爾村 紹介 目的②

曾爾青少年自然の家がある奈良県宇陀郡曾爾村の概況説明があった。曾爾村は自然環境を生かした観光地としても有名であり、曾爾高原、鎧岳、兜岳などがある。奈良県無形民俗文化財に指定されている獅子舞もある。また、人口減少も伴う日本の村の実態を知る機会となった。



○自然の家活動プログラム体験①「木のスプーン・フォークづくり」 目的④

曾爾青少年自然の家の活動プログラムの一つである「木のスプーン・フォークづくり」を体験した。スプーンやフォークの柄に杉の薪を利用し、木の特徴を生かしながら思い思いに作成した。作成したものを9月2日（火）に実施した野外炊事プログラムで使用した。



<8月29日（金）～8月31日（日）>

○ホストファミリーとの対面式 目的⑤

室生国際交流村実行委員会から7件の家庭がホストファミリーとしてホームステイを受入れていただいた。室生振興センター研修室において、ドイツ団員とホストファミリーが初めて顔を合わせる対面式を実施した。「訪れて良かった」、「来てもらえて良かった」と、双方が思えるようなホームステイになるよう、事前に参加者とメールで連絡を取り合っていた。どの方々が自分のホストファミリーになるかはドイツ団側にも伝わっているが、あえてホストファミリーの顔はわからない状態にして対面式で初めてわかる仕掛けをした。対面式では、どのホストファミリーかがわかるゲームを実施し、大いに盛り上がった。その後、ホストファミリーと互いに自己紹介を行い、各家庭に向けて出発した。



○ホームステイ・ホストファミリーとの歓送会 目的⑤

奈良県、三重県、大阪府の各ホストファミリー宅にて2泊3日のホームステイを実施した。各家庭にて家庭料理を振る舞っていただき日本の生活を体験した。観光やショッピング、外食にも連れて行っていただいた。日本のことをたくさん体験し、ホストファミリーとの繋がりを深める機会となった。

また、歓送会では、ドイツ団からホストファミリーへ感謝の気持ちを込めた歌のプレゼントやダンスが披露され、充実した時間となった。



○温泉体験 目的②

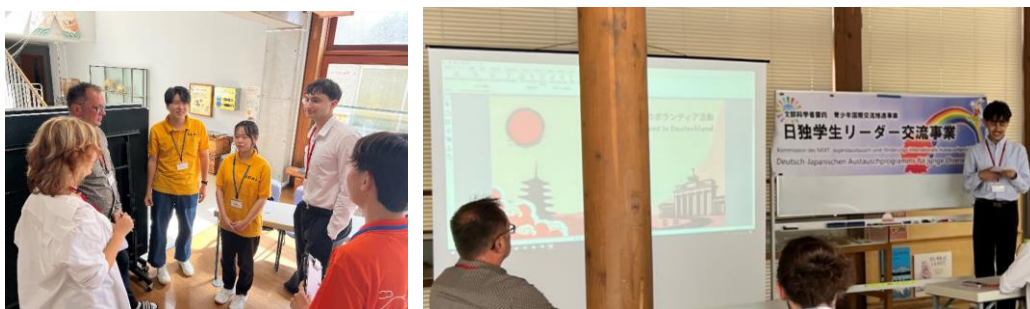
曾爾村内の温泉施設にて温泉体験を実施した。ドイツ団は日本の入浴マナーを守りながら日本の温泉を体験できた。温泉の後は、施設内の食事処にて夕食として和食を食べた。

また、施設内に設けられた売店では、地域の特産品が陳列されており、実際に触れることで曾爾村のことを更に知る機会となった。

<9月1日(月)>

○ドイツ団及び曾爾法人ボランティアの活動紹介 目的①

国立青少年教育振興機構に登録している法人ボランティアのうち、国立曾爾青少年自然の家で活躍する代表者から、ドイツ団へ自己紹介とアイスブレイクを含めたレクリエーションを行った。その後、スライドを用いて現在取り組んでいるボランティア活動やボランティアというものに対する考えをお互いに発表し、双方のことを知るきっかけとなった。



○訪問「曾爾村立曾爾小中学校」 目的③

曾爾村にある「曾爾小中学校」を訪問し、児童生徒との交流を通して日本の小・中学校や地域の子どもたちの実状を学んだ。

午前の部では、7～9年生（中学1年～3年生）と書道を通じて交流した。交流の中でドイツ団は日本語で自己紹介、生徒はドイツ語で自己紹介する機会があった。書道では、生徒による進行の下、「和」いう漢字を毛筆で書き、清書は色紙に行った。日本の授業を体験できる機会となり、書道という文化を体験できた。

給食時にはドイツ団は各教室で生徒と一緒に給食を食べた。また、ドイツの学校ではない清掃を体験した。日本の「みんなで使う場所は、みんなで清掃する」という文化を知り、体験する貴重な時間となった。

午後の部では小学6年生と手すき和紙づくり（図工）で交流した。児童による進行の下、手すき和紙づくりという日本の文化を体験した。ドイツ団は各々個性ある飾りつけを行い、和紙を完成させた。書道で清書した色紙、図工で作成した手すき和紙は記念品として持ち帰った。ドイツ団だけでなく、日本の児童生徒にとってもドイツに対する知識を深めるとともに興味関心を高める時間となった。



○訪問「曾爾村学童保育」 目的③

曾爾村にある「曾爾村学童保育」を訪問し、過疎地域の学童保育所に通う地域の子どもたちの実状を学んだ。また、子どもたちとドイツ団、曾爾法人ボランティアと一緒にレクリエーションゲームをする中で、日本とドイツのレクリエーションゲームや指導方法について学ぶ機会となった。





○ボランティア交流企画 目的①

国立曾爾青少年自然の家で活動する法人ボランティアが、ドイツ団と親睦を深めるためのゲームなどを企画し、交流会を実施した。また、互いに感じた疑問や質問などについて意見交換し、更に親睦を深めた。



<9月2日(火)>

○自然の家活動プログラム体験②「曾爾高原ハイキング(亀山)」 目的④

曾爾青少年自然の家の活動プログラムの一つである「亀山ハイキング」を体験した。天候にも恵まれ、道中では亀山の美しい景色を楽しむ様子が見られた。山頂では記念撮影を行い、曾爾法人ボランティアとの交流を深める機会となった。

今回のハイキングを通じて、日本の自然環境や教育的な取組に対する理解を深めるとともに、心身のリフレッシュを得ることができ有意義な時間となった。



○自然の家活動プログラム体験③「野外炊事」 目的④

国立曽爾青少年自然の家が利用団体に提供をしている野外炊事プログラムを体験した。はじめに、国立曽爾青少年自然の家職員から、実際に子どもたちへ指導を行う際の留意点や言葉がけ、安全管理の視点等を学んだ。「グループで協力し、美味しく楽しく作る」という目的の下、ドイツ料理の「ポテトサラダ」、和食の「おにぎり、みそ汁」作りに挑戦した。通訳やスマートフォンの翻訳アプリに頼らず、互いの料理を教え合い、共同作業を進める中で協力し、美味しい料理を作った。また、スマートフォンで全てが解決する時代の中で、あえて通訳や翻訳に頼らないことで、ドイツ団、曽爾法人ボランティアともにノンバーバルコミュニケーションを用いるなど、“言葉の壁”を自身の力で越える体験となり、親睦も深める機会となった。





○曾爾法人ボランティアとのディスカッション 目的①

事前にドイツ団と国立曾爾青少年自然の家で活動する法人ボランティアから、ディスカッションしたいテーマを集約した。当日は、昨年度に続き奈良教育大学特任教授である生田周二先生をコーディネーターとして迎え、3時間のディスカッションを行った。コーディネーターが提示するボランティア活動に関する世界のデータや、事前に集約したディスカッションテーマを参考にしながら、各国のボランティア活動・参画の意義を共有し理解を深めた。普段取り組んでいる様々なボランティア活動に対しても質問や意見を出し合った。

また、コーディネーターによってドイツと日本の教育課程、教育制度の違いがボランティア活動に参画できる環境の違いに影響していることの説明があった、このテーマからボランティア活動の内容だけではなく、各国の環境や教育など幅広いテーマにまで視野を広げて、お互いの国を知る有意義な時間となった。



<9月3日(水)>

○朝のつどい体験 目的④

曾爾青少年自然の家の取組の一つである「朝のつどい」を体験した。

ドイツ国旗、日本国旗の掲揚を行い、早朝の清々しい空気の中、事前研修で練習したラジオ体操も実施した。

その後、曾爾の職員に別れを告げ、鉄道で東京へ向かった。



<9月4日(木)>

○講義「国立青少年教育振興機構 概要」

講師：国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金部国際・企画課長 林 潤一郎 氏

日本における青少年教育のナショナルセンターである当機構について、概要説明を本事業担当課長が行った。当機構が実施する事業や青少年支援の取組に関する説明及び若者が直面している昨今の状況に関する質疑応答を行った。



○講義「若者の社会参画」

講師：神奈川大学 人間科学部人間科学科 教授 齊藤 ゆか 氏

本講義では、若者の社会参画を促進するため、齊藤氏自身が行っているボランティア活動の紹介と生涯学習の理論・実践を整理した。

参加と参画の概念、歴史的背景、若者の行動率や課題を分析し、体験型学習や地域・国際交流事例を紹介した。そして、プログラムの「成果の見える化」や中長期的視点の必要性を強調し、潜在的層への働きかけと多様な参加機会を創出する重要性を学んだ。



<9月5日(金)>

○訪問「一般社団法人淡路エリアマネジメント」

説明者：事務局 原田 賢治 氏 ほか 3名 及び学生

淡路エリアマネジメントは、オフィス・レジデンス・商業施設などからなる大型複合施設ワテラス（WATERRAS）を拠点に、「地域交流」「学生居住推進」「地域連携」「環境共生・美化」の4つを柱に活動し、再開発後のコミュニティ形成と活性化を目指している。その中で、学生マンションを運営し、学生に割安な家賃で住居を提供する代わりにマルシェや防災イベントなどを企画運営する「学生×地域」の仕組みが特徴であり、居住する学生自らがそのシステムや活動の内容について説明し、交流を促進するための取組について説明を受けた。



○訪問「NPO 法人 iPledge」

説明者：事務局スタッフ 山口 記世 氏 ほか 学生2名

iPledge は環境問題をはじめとする様々な社会問題に取り組んでおり、今回は主に音楽フェスティバルで実施するゴミを拾わない環境ボランティア活動について紹介いただいた。ごみ分別ナビゲートやリサイクル、エコ食器の利用などを、来場者を巻き込み主体となるような働きかけや仕組みが説明された。単なる清掃ではなく、来場者の意識と行動を変えることを目的とする点が印象的だった。また、ボランティアやスタッフ自身が楽しみながら能動的に活動するための組織づくりが持続可能な活動に繋がっているということにも強く共感した。



<9月6日(土)～7日(日)>

○日独合宿セミナー(ディスカッション/全体発表/交流会)

9月中旬からドイツに派遣される日本団と、1泊2日で合宿セミナーを行った。アイスブレイクの後、日本団団長及び副団長がファシリテーションを行い、教育及び職業制度や各国におけるボランティアの位置付けといった観点から、日独の共通点と相違点を話し合った。2日目の全体発表では、ドイツ団と日本団が2グループずつに分かれ、ディスカッションで得た気づきや学びを発表した。



<9月9日(火)>

○学習成果発表会

2週間の研修で学んだことを、「①日本での気づき」「②日独の共通点」「③日独の相違点」「④持ち帰る成果」の観点からまとめ、学習成果発表会を行った。オンライン視聴を可能にし、訪問先団体や講師、地方プログラムに携わった方々にも発表を聞いていただいた。



4. 学習成果発表会



Deutsch-Japanisches
Austauschprogramm für
junge Ehrenamtliche 2025

令和7年度日独学生青年
リーダー交流

Thema: "Gesellschaftliche
Partizipation junger Menschen"

テーマ: 「若者の社会参画」

DJJA für junge Ehrenamtliche 2025 9. September 2025



Wer wir sind... 私たちについて...



- Angelina Sharipova
アンジェリーナ・シャリポヴァ
- Kaja Boysen
カヤ・ボイセン
- Daniel Braun
ダニエル・ブラウン
- Viktoria Hess
ヴィクトリア・ヘス
- Sherin Ahmed
シェリン・アハメド
- Daniel Nagayev
ダニエル・ナガイェフ
- Jamie Kolles
ジェイミー・コレス
- Sascha Kummer
ザシャ・クンマー
- Pascal Wiesenberg
バスカル・ヴィーゼンベアク
- Emma Wolff
エマ・ヴォルフ

DJJA für junge Ehrenamtliche 2025 9. September 2025

Agenda

- Was ist uns in Japan aufgefallen?
Was haben wir gelernt?
- Gemeinsamkeiten und
Unterschiede zwischen Deutschland
und Japan
- Welche Erkenntnisse und Impulse
nehmen wir für unsere eigenen
Aktivitäten in Deutschland mit?

DJJA für junge Ehrenamtliche 2025

9. September 2025

アジェンダ

- 日本で気がついたこと、学んだこと
- 日独の共通点と相違点

ドイツに持ち帰り自分の活動に生か
したい認識や刺激

Was ist uns in Japan aufgefallen?

- Ordnung und Sicherheit
(*Regelbewusst, Harmonie,
Sauberkeit, Infrastruktur*)
- Verantwortungskultur
(*Fleiß, Disziplin, Pünktlichkeit,
Zurückhaltung*)
- Land der Gegensätze
(*Moderne, Tradition*)

DJJA für junge Ehrenamtliche 2025

9. September 2025

日本で気づいたこと

- 秩序と安全（規則を守る、調和、清
潔、インフラ）
- 責任感の文化（勤勉、規律、時間に
正確、控えめ）
- 相反するものが共存する国（新しさ、
伝統）

Was haben wir gelernt?

- klare Lebenswege
- junge Menschen nutzen Social Media, um sich zu äußern
- Bildung nicht kostenfrei und lange Fahrtwege zur Uni
(erschweren Partizipation/Engagement)
- Partizipation bedeutet in Japan eher mitwirken und nicht laut protestieren
- traditionelle Geschlechterrolle

DJJA für junge Ehrenamtliche 2025

学んだこと

明確な人生行路

- 若者は自己表現にソーシャルメディアを使う
- 教育が無償でない、大学が遠い（参画/社会参加を難しくする）
- 日本では参画とはどちらかと言えば協力であって、声を大にして抗議することではない。
- 伝統的な、男性・女性の役割

9. September 2025

Gemeinsamkeiten und Unterschiede zwischen Deutschland und Japan

Ehrenamt

Gemeinsamkeit

- Motivation
- junge Menschen sind aktiv

Unterschied

- in Japan eher gemeinschafts- und projektorientiert
- in Deutschland vielfältige Strukturen für Ehrenamt

DJJA für junge Ehrenamtliche 2025

日独の共通点と相違点

ボランティア

共通点

- モチベーション
- 若者は積極的

相違点

- 日本ではどちらかと言えば共同体やプロジェクト重視
- ドイツにはボランティアのための多様な仕組みがある

9. September 2025

Gemeinsamkeiten und Unterschiede zwischen Deutschland und Japan

Gesellschaft

Gemeinsamkeit

- demographische / räumliche Herausforderung
- Gemeinschaftssinn

Unterschied

- Regeln in Japan
- in Deutschland mehr politische Teilhabe junger Menschen

日独の共通点と相違点

社会

共通点

- 少子高齢化による / 過疎化 / 都市化による課題
- 共同体意識

相違点

- 日本では規則で決める
- ドイツでは若者の政治参加が多い

Gemeinsamkeiten und Unterschiede zwischen Deutschland und Japan

Schule

Gemeinsamkeit

- Schulpflicht
- hoher Standard

Unterschied

- in Japan zentral organisiert
- in Deutschland kaum Schulclubs

日独の共通点と相違点

学校

共通点

- 義務教育
- 高い標準

相違点

- 日本では中央で決める
- ドイツでは学校のクラブ活動がほとんどない

Welche Erkenntnisse und Impulse nehmen wir für unsere eigenen Aktivitäten in Deutschland mit?

- junge Menschen für das Ehrenamt begeistern
- gesellschaftspolitische Themen zugänglicher für junge Menschen machen
- Engagement lohnt sich - neue Ansätze entwickeln, um junge Menschen zu begeistern

ドイツに持ち帰り自分の活動に生かしたい認識や刺激

- 若者が熱意をもってボランティア活動をするように仕向ける
- 若者が社会政策的テーマに入っていやすいようにする
- 社会参加は報われる - 若者を感激させる新たなアプローチを生み出す

Unser herzlicher Dank geht an...

- NIYE
- JDZB
- alle besuchten Einrichtungen und Menschen
- allen Referentinnen und Referenten
- unsere Gastfamilien
- alle Ehrenamtlichen, die uns Einblicke in ihr Leben gegeben haben
- unseren Betreuer*innen von NIYE und Soni Youth Outdoor Center
- unseren Dolmetscher*innen

皆さんに感謝します

- 青少年教育機構の皆さん
- ベルリン日独センターの皆さん
- 全ての訪問先の施設とそこで出会った皆さん
- レクチャーの講師の皆さん
- ホストファミリーの皆さん
- ボランティアの皆さん、皆さんはその生活を垣間見せてくれました
- 機構と曾爾青少年自然の家の担当者の皆さん
- 通訳の皆さん



5. 成果と課題（国際・企画課）

（1）企画

令和7年度は、奈良県曽爾村での地域滞在をはじめとして、ホームステイ、学校・学童保育施設訪問、自然体験、講義・ディスカッションを組み合わせ、日独の若者が社会参画の現場を比較し学ぶ構成とした。

まず、曽爾青少年自然の家での活動体験や曽爾小中学校訪問、学童保育交流を通じて地域教育の実態を理解する機会を設けた。また、国立青少年教育振興機構による概要講義と「若者の社会参画」に関する3時間の講義及び合宿セミナー、さらにNPO法人 iPledge 訪問を組み込み、能動的なボランティア活動と周囲を巻き込むことの大切さを考えた。加えて、淡路エリアマネジメント訪問を通じ、都市再開発と地域連携の仕組みを学ぶ場を設定し、学生との意見交換を通して若者と社会の接点を考える機会を提供した。

（2）成果

第一に、昨年度中止となったホームステイの実施により、家庭生活や観光を通じて交流が深化した点は大きな成果である。ホストファミリーとの生活を通じ、日本の文化や価値観を体験し、ドイツ側からも「日本の家庭の温かさを感じられて2週間のハイライトとなった」との声が寄せられた。第二に、学校・保育訪問では書道や給食、清掃体験を通じて日本文化を学び、交流を通じて児童側にも国際理解を深める効果が見られた。第三に、自然体験活動では安全管理や声かけの重要性を学び、翻訳アプリに頼らず協働する中で非言語コミュニケーション力を高めた。さらに、講義と合宿セミナーでは、各国のボランティア活動や教育制度を比較し、成果の見える化や中長期的視点の必要性を理解した。

NPO法人 iPledge 訪問では、来場者参加型の環境ボランティアの仕組みを学び、単なる清掃ではなく意識と行動変容を促す設計の重要性を認識した。加えて、淡路エリアマネジメントでは、ドイツ団と同数程度の学生ボランティアが集まり、地域活動の取組を学ぶだけでなく、学生と社会のつながりから将来の夢に至るまで、多岐にわたる率直な意見交換が行われた。これにより、双方にとってキャリア形成や社会参画への意識を高める貴重な機会となった。

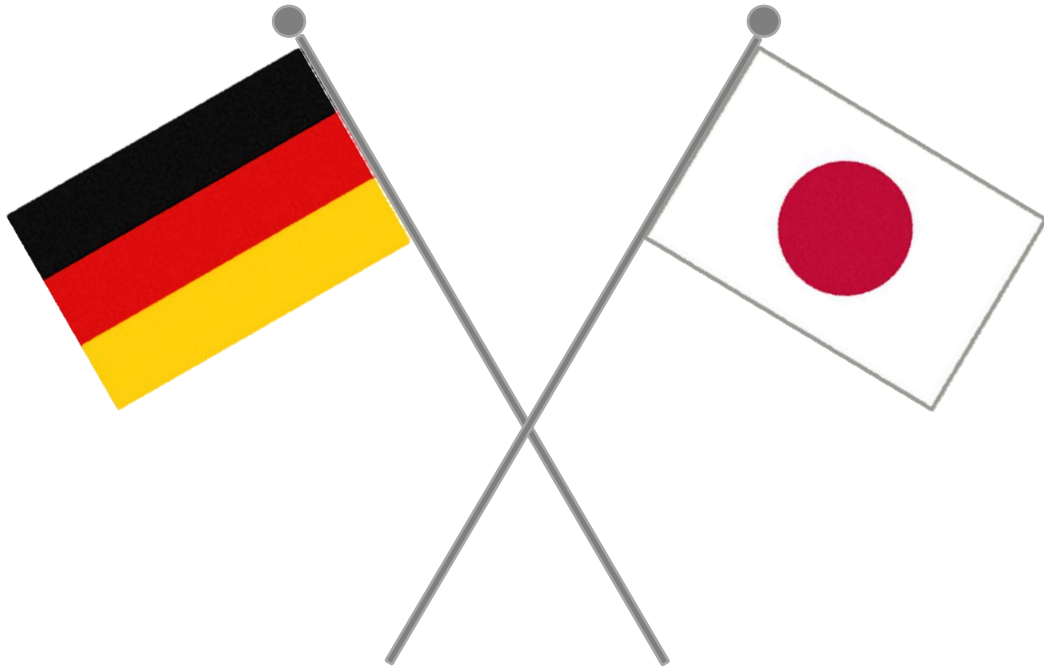
（3）課題

一方で、訪問や体験が連続する日程の中で、ディスカッションの深掘り時間が十分に確保できなかった。昨年度同様、プログラム間の接続を明確化し、より意識的に討議枠を設ける必要がある。また、ホームステイの実施時期も課題として挙げられる。来日直後にホームステイを行うと、日本の生活習慣に慣れないまま家庭に入ることになり、双方に負担が生じる可能性がある。今回は宿泊場所やスケジュールの都合で地方プログラムを先に実施したが、次年度以降は東京プログラムを先に配置し、都市部での活動を通じて日本文化や生活に触れた後に地方プログラムを行うことが望ましい。また、ホームステイ前に家庭マナーや生活習慣に関するオリエンテーションを研修に組み込み、参加者の不安を軽減する必要がある。

東京プログラムにおいても、日本の文化や歴史に触れられる時間を設け、都市部ならで

はこの文化的学びを強化したい。加えて、プログラム全体を通じて、成果発表後のフォローアップや交流継続、行動変容の追跡を仕組み化することが求められる。

本プログラムの実施に当たり、訪問先の団体・施設、ホストファミリー、講師の皆様、並びに運営にご協力いただいた関係機関に心より感謝申し上げます。皆様のご理解とご支援により、参加者は多くの学びと貴重な体験を得ることができた。今後もこの成果を次年度以降に活かし、より充実した交流事業を目指していきたい。



令和7（2025）年度 文部科学省委託事業
日独学生青年リーダー交流事業 事業報告書

令和8年3月発行

編集発行



独立行政法人 国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金部 国際・企画課

【Web サイト】 <https://www.niye.go.jp/>

【国際事業特設サイト】 <https://ie-program.niye.go.jp/>

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3-1

TEL 03-6407-7756

本報告書は、文部科学省の委託事業「青少年国際交流推進事業」として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施した令和7年（2025）年度「日独学生青年リーダー交流事業」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。